

11. 漁業の一般的特徴

ホンデュラスの漁業は沿岸零細漁業と沖合資本漁業とに二分できる。沿岸零細漁業は丸木船を使用し、その大部分は距岸100m程度の極めて沿岸の部分で行われている。丸木船は原木をくりぬいて作られるので、その大きさは雑多であるが最大で2トン程度である。普通、樅および帆を使用して航行しているが、なかには船外機を用いているものもある。使用している船外機は最大でも35HP程度である。漁具は主として釣具、投網であるが一部刺網、地曳網等が用いられている。これら沿岸漁民の大部分は独立自営で、ごくわずかのものが組合を組織している。漁民の数は大西洋岸で3,000名、太平洋岸で1,000名程度であると推定されている。これら沿岸零細漁業による漁獲量は僅かで、一般に鮮度保持の設備もないので、水揚げ場所で直ちに販売を行っている。

これにひきかえ、沖合資本漁業では近代的な漁船及び冷凍・冷蔵工場を有し、現在7社が操業している。1978年の資料によると、これら沖合漁業に従事する漁船団は261隻で、その内訳はエビ漁船151隻、イセエビ漁船70隻、エビ・イセエビ兼業船37隻、魚のみを対象とする漁船3隻となっている。これらの沖合漁業に従事する漁船は、全長で70~80フィート級が大半であるが、最大級では100フィートを超すものもある。大部分は鉄製であるが、一部に木造、グラスファイバー製のものもある。使用する機関はディーゼルで、最大のもので350HP程度である。この沖合資本漁業は1950年代に始まり、主として米国を対象とした輸出用のエビ、イセエビを漁獲している。また、これら企業は工場に700人、漁船乗組員として2,300人を雇用している。

最後に養殖漁業についてふれておく。現在2社が海エビ及び川エビの養殖に当たっているが、いずれもまだ調査・研究の段階にとどまっている。これらの2社は大西洋岸及び太平洋岸に夫々1社づつ設置されており、養殖漁業の発展には同国政府も大きな期待をかけているようである。

12. 漁業の背景

別章でふれたように、沖合資本漁業には現在7社の企業体に従事しており、総計261隻の漁船団を擁している。これら企業はいずれも合併で、ホンデュラス系資本51%に対し外国系資本47%の形をとっており、所属漁船もホンデュラス籍であるが、つい最近まで米国を含む外国籍漁船によってその過半数が占められていた。沖合資本漁業に従事するエビ及びイセエビ漁船団

の1968年以降年次別の推移は第1表に示す通りである。

第1表 沖合資本漁業に従事する漁船数の年次別推移

年	ホンデュラス籍	米 国 籍	その他の外国籍	計
1968	36	30	—	66
69	39	40	2	81
70	42	54	4	100
71	45	74	3	122
72	73	85	4	162
73	118	58	3	182
74	106	77	6	189
75	122	80	6	208
76	135	87	16	238
77	255	—	—	255
78	261	—	—	261

7社の内訳は、グアナハ島にマリスコス・デル・カリーベ社、カリベアン・プロダクツ社及びビンドゥストゥリ・デ・アルマドレーレス社の3社、ロアタン島にマリスコス・イブール社、マリスコス・デ・バイーア社の2社、プエルト・カスティージャにエンパカドーラ・デ・カスティージャ社、バーラ・カラタスカにあるアリメントス・マリノス社であって、これら企業には工場に総計700人、漁船乗組員として総計2300人が従事している。

一方、沿岸零細漁業に従事する漁民は大西洋側で3,000名、太平洋側で1,000名と推定されているが、これらのうち半数以上が兼業の漁民であると考えられる。沿岸漁業に従事する漁艇は、1978年に2,039隻が登録されている。一方、1979年の登録数は632隻で、沿岸漁業の実態は誠につかみにくいように思われる。漁艇は、別章でも述べたように、原木をくりぬいて作った丸木舟であるから大きさはいろいろであるが、最大のもので2トン程度である。普通、または帆を用いて航行するが、船外機を使用するものもある。船外機は最大のもので35HP程度のものである。

漁港及び関連施設については、企業体の場合、それぞれが一応設備のととのったものを所有しているが、沿岸漁民のための特別な施設は準備されていない。

沿岸漁業の場合でも、漁業に従事する場合は漁業法により、漁業従事者証明書を持つべきで

あると定められているが、この実施は困難で、実際にこの手続きを行う者は極めて少数である。

沿岸漁業でも大型漁艇の場合、普通船頭の他に2名位の漁夫が乗組むが、水揚げの分配率は船頭22%、漁夫1名につき17%程度で、残り44%が船主の取り分となる。ただし、漁の期間中、乗組員の食費は船主によって支払られる。

沖合資本漁業の場合、エビ漁では漁獲物の売上げ20%が船長の歩合、イセエビ漁では、カゴを用いる場合25%が船長の歩合となっている。潜水夫を用いるイセエビ漁の場合、潜水夫と船長補佐に水揚げ100ポンドにつき15乃至20レンピーラ(US\$7.5-10.0)の割で支払った後、20%を船長が歩合として受取る。

一般の沿岸漁業の場合、消費地に近い場合は漁獲物を仲買人に売ることができるが、これはごく限られた地域であって、零細漁民全体から見ると極く僅かな比率である。消費地から離れている場合は、自家消費にまわさざるを得ないのが実情である。これらの事柄を考えると、零細漁民の年間収入は、最低生活費以下のレベルで、従って兼業を余儀なくさせている。

河川での漁は、附近住民が農業に従事しているためその余暇に行われる程度である。淡水のヨホア湖では沿岸で用いるのと同形の丸木舟を用い、釣り、投網、刺網等によって漁業を行っているが、漁業活動は特定の季節に集中しているようである。なお、河川・淡水湖で兼業に漁業を行う者は約225人である。

零細漁業者の社会的特徴は、文盲率の極めて高いこと、また16才から30才位までの間では一ヶ所に定住せず、季節によりまた必要に応じてひんばんに移動することである。また、これら零細漁業者の居住地は交通・通信の不便な所、電気・水道の設備もなく、医師もいない僻地が多い。

13. 漁業の現況

ホンデュラス国は国土面積112,088km²で海岸線はカリブ海側に693kmと太平洋側に162kmを保有している。カリブ海側(北岸)は比較的平坦な海岸線であるに対し太平洋側(南部)は湾曲が多くフォンセカ湾(Golfo de Fonseca)内側に面している。

ホンデュラスの漁業は南北海岸に点在する漁村で長さ3m~5m程度のカヌー(丸木舟)に依って手釣, 投網, 地曳網, 刺網等の漁具で距岸数百米以内と海岸線附近に点在するラグーン(汽水湖)を漁場として操業している沿岸漁業と北岸沖合のカリブ海に点在するロアタント島(1. De Roatan)とグユアナジャー島(1. De Guanaja)を主たる基地とする企業的エビトロール漁業がある。

又試験的段階ではあるが海産エビ, 淡水エビ, テラピアの養殖事業がある。

沿岸漁業に依る漁獲量は少なく, 魚を保存する製氷設備, 保冷設備は殆んど無く, 魚の販売流通機構が貧弱であって, 漁獲物の大部分は地元で消費されて, 魚介類の流通範囲は狭隘である。

沿岸漁業の振興の為にここ数年間に各漁村に協同組合が設立されて, この協同組合を基点として漁業活動の拡大を計ってはいるが, 未だ軌道に乗っていないのが現況である。

沿岸漁場では現在の漁船, 漁具では操業出来ない未開の漁場が多く未知の資源が潜在するものと推察される

13-1 沿岸漁業の概況

沿岸漁業は海岸に点在する漁村の漁民によって小型舟即ち一本の原木の幹部をくり抜いた丸木舟を使用し手釣, 小型地曳網, 刺網の幼稚な漁具を以って魚介を漁獲しているが, その漁獲量は少なく漁民は何れも零細である。

丸木舟は全長3m~5mが主体であって, 僅かではあるが10m位の丸木舟も見受けられる。この丸木舟の材質はホンデュラス産の松類軟材に依るものが多く耐用年数は4~5年である。一部堅材を使用した舟は耐用年数は20~30年である。この丸木舟は何れも原木の幹部をくり抜いたものであるが, ホンデュラスの原木の径が比較的小さく原木をくり抜いただけでは乾舷が保てなく, 両舷を板で積層して補強している。耐波性の向上に改善の努力は見受けられるが, 根本的に船型を改良しなければ, この船では安定が悪く風力2~3の沿岸漁場での満足する操業は不可能である。

漁具も又幼稚な手釣, 投網, 刺網, 地曳網を使用する程度で, 沿岸漁場を充分活用出来ず, 漁獲も少ない。最近導入された刺網はモノフィラメントナイロン網を使用しているが, 一般魚

用は目合 8.12cm(日本規格 9.00cm(3寸目))掛目 65~100掛, 全長仕立上り 200m~400m 1反を使用し, 複数(反)は使用していない。使用方法も海岸から直角に沖合に投網し網は海底, 表面に達している。一部施刺として使用する処もあるが, 船の不安定から魚群を十分に補促することは出来ない。処に依ってはサメ刺網としてマルチフィラメント #18, 目合 1.775cm(日本規格 6寸目(18cm))掛目 55掛, 全長 150mの刺網を使用しているが, これも使用は1反程度である。

漁獲物は主としてスズキ(Robalo), ヒラアジ(Jurel), サワラ(King fish)及びサメ(Terbiero)類で, 漁獲量は少ない。刺網は米国財団(U.A.R.E.)の援助に依って導入されたもので, 最近では各漁村に, この刺網, 漁具が定着して, 最近の漁具とされている。今後, 舟型の改良に依ってこの刺網, 漁具を有効に使用する事に依って漁獲は向上するものと思われる。

漁獲物は大部分が地元で消費されているが, 交通の比較的良好な Tela, LeCeibaの近村には仲介人又は協同組合連合会で余乗魚を買取って近辺の都市に運搬販売されている。魚価は1級魚 1.LB=1.05Lp(1kg=278円), 2級魚 1.LB=0.85Lp(1kg=224円)で, 都市では現地価格に約 1.LB当 0.5Lp-1Lp(60円~120円)上乗せして販売されている。現在では道路状況, 流通機構が不十分な為, 販売範囲に限度があり, 今後漁業発展の為に流通販売面の整備が不可欠である。

13-2 協同組合

ホンデュラス政府は沿岸漁業の振興発展の為に天然資源省協同組合助成局農牧部に於て漁業協同組合の組織作り, 管理, 運営を推進し現在 5地区に 20組合が設立されている。

1) コルテス(Corties)地区

マスカ(Masca), オモア(Ohoa), バハマール(Bajahar), 3組合

2) テラ(Tela)地区

ロスココス(Los Cocos), トルナベ(Tornabc), サンファン(San Juau), パライソ(Paraiso), レンピーラ(Len Pira), トウリウンホ(Triun Fo) 6組合

3) セイバ(Ceiba)地区(Union Atlantide)

コパール(Copal), サンボククリーク(Sambo Creek), スエバルメニア(Nueva Almenia), リオエステバン(Rio Esteban) 4組合

4) トウルヒーヨ(Trujillo)地区(Union Colonena)

グアダルベ(Guadalupe), サンタフェ(Santa Fe), トウルヒーヨ(Trujillo), サンタロサデアグアン(Santa Rosa De Aguan), リモン(Limon) 5組合

5) スール(Sur)地区

アマバラ (Amapala), サンロレンソ (San Lorenzo) 2 組合

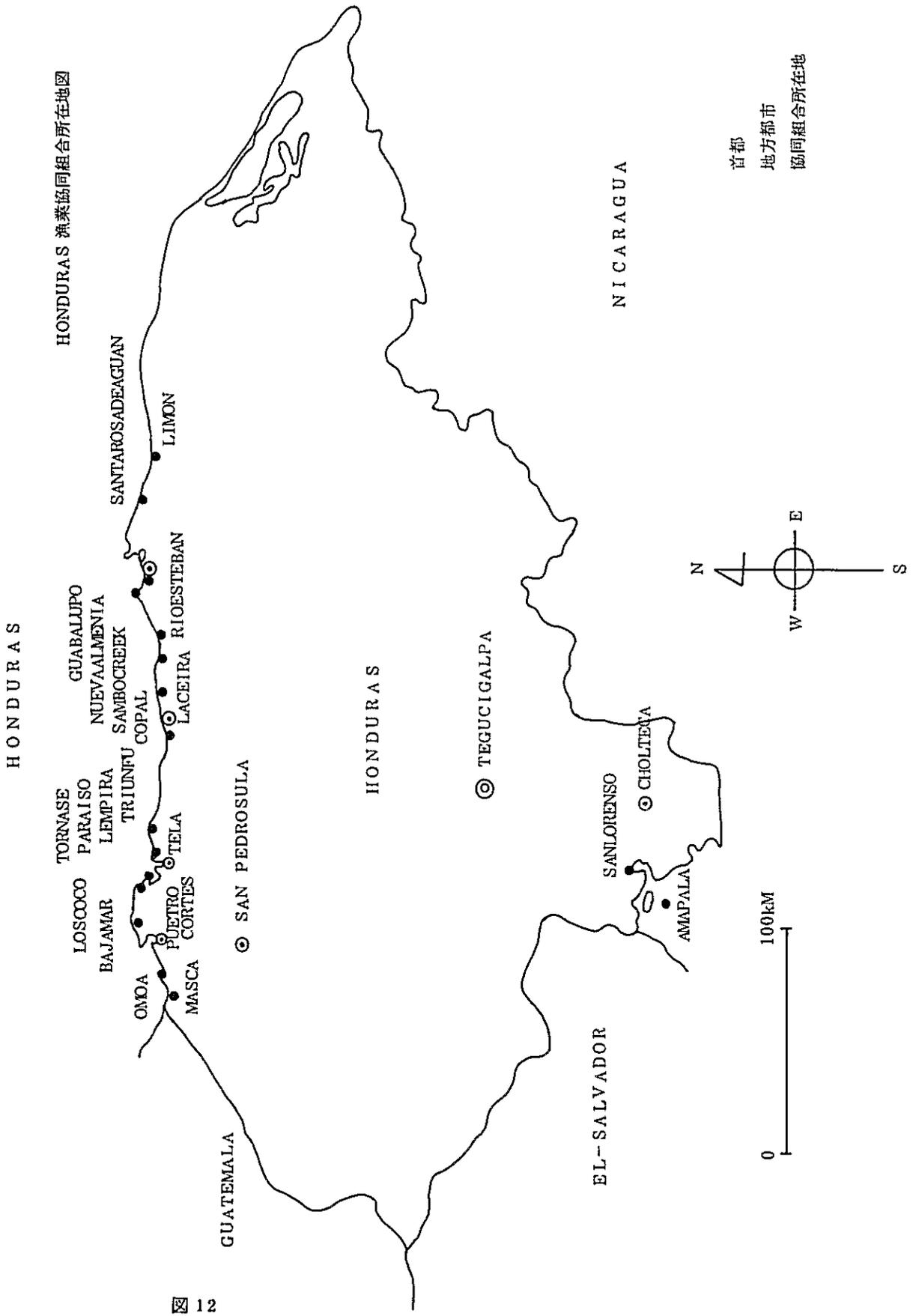
ホンデュラスの漁師は北岸に約 3,000 名, 南岸に約 1,000 名, 計約 4,000 名とされている。各組合に登録されている組合員数は 20~30 名であって組合員数は 400~600 名で総漁師の 10~15% 程度, その内実際に漁業活動をしている者は 1/3 程度である。

組合員外の漁師は個人で舟, 漁具を持つか, 個人的に船主から舟, 漁具を借用して漁業を行っている。組合員は協同組合所有の舟, 漁具を使用して漁業を行っている。但し各協同組合共に組合員全員が使用する舟, 漁具を確保出来ず 1/3 程度の漁民が働ける程度である。十分な舟, 漁具がない為組合員を離脱するものが出ている。

一部地区の協同組合では協同組合連合会で漁獲物の集荷, 売付け, 販売を行い, 組合の体質強化を計っているが, 資金, 機材, 人材等の不足で未だ見る可き成果は揚っていない。

現在日本から派遣された青年協力隊員が各地区の協同組合に配属されて, 漁撈技術の指導並び協同組合の運営, 管理に従事している。今後この指導管理が成功すればホンデュラスの沿岸漁業の発展に寄与するものと思われる。

なお, 現有する協同組合の所在地を図 12 に示す。



13-3 漁 舟(カヌー)

ホンデュラスの沿岸漁業には全長4 m内外の丸木舟(カヌーコ)を使用している。この舟は殆んど無動力舟で楫(カナレーテ)を用いた手漕ぎで、稀には単純な三角帆で帆走する事がある。

舟の構造は原木の幹部を“クリ”抜き一部外舷に板を積層したもので、復原性は極めて悪く風力2以上の海況では危険である。丸木舟はアフリカ、南太平洋諸島に比較して小型であり、安定が悪い。これはホンデュラ-国海岸地帯には大型丸木舟(10m以上)を建造する大材が入手困難な為である。材質は軟材の松類が多く一部堅材のものも見受けられた。軟材の耐用年数は3~5年、堅材の舟は20~30年の長期である。

近年舟の動力化の気運が出て来る特に青年海外協力隊の指導に依って年々増加の傾向にある。動力化は船外機が主体で、一部には小型ディーゼル Eng.を取入れているものもある。動力舟は殆んど全長8 m以上の比較的大型船である。

動力舟も舟の構造は殆んど改良されていない為、舟の安定性の向上がなく船外機の取付け位置が舟尾、又は舟内の舟底に開口を設けて取付けている。船外機の馬力は全長8 m迄のもの12~30馬力を搭載している。船内搭載のディーゼル Eng.は全長8 m以上の舟で10~13馬力を使用している。船内の取付けは堅材の Eng.台を設けて取付けているが、船底の構造から堅牢な取付けが出来た舟の動力化が進んではいないが、船外、船内機関共に取扱いの知識が無く且つ部品の補修も充分で無く、動力を導入しても故障で使用出来ない台数が可成りある。今後、沿岸漁業の発展、舟の動力化等を計画する場合 Eng.の補修、管理対策を充分に考慮する必要がある。

第2表 漁業協同組合所有の船舶機一覧表

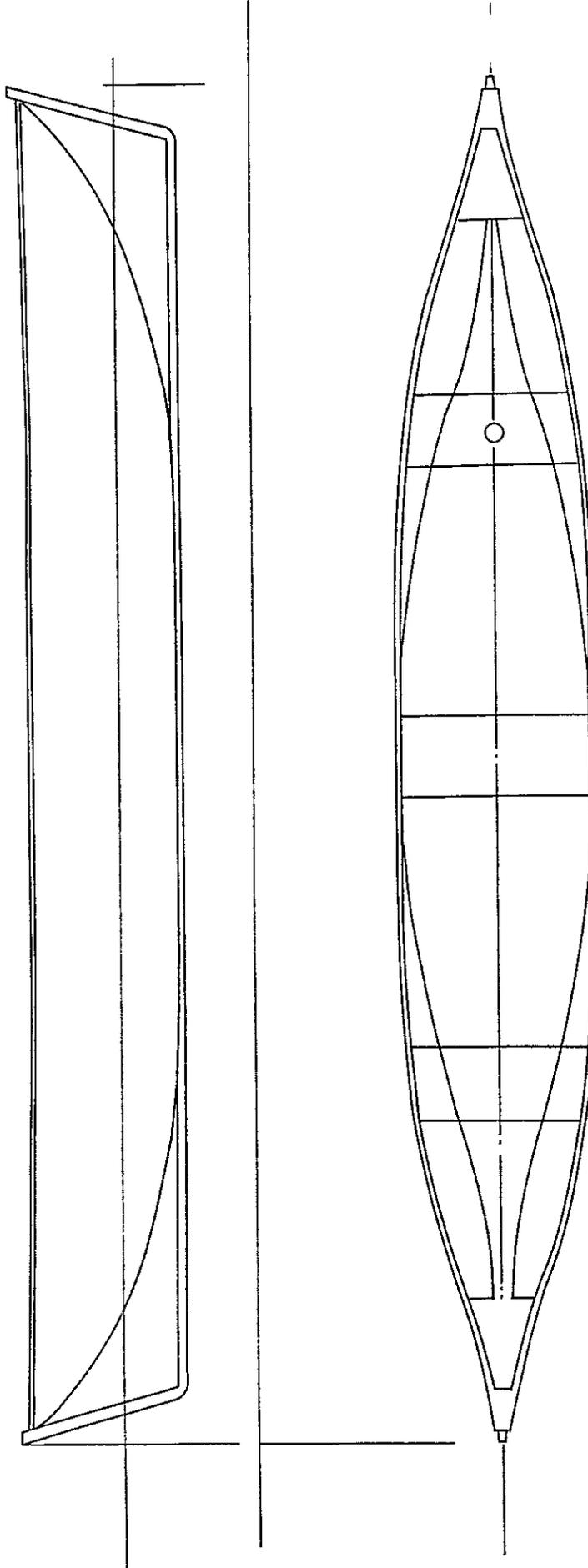
(1979年10月末調)

組 合 名	機 種	馬 力	台 数	備 考
AMAPALA	外 YAMAHA	12 p.s	1	修 理 中
SAN LORENZO	外 MERCURY	40 p.s	1	
MASCA	外 YAMAHA	12 p.s	1	
BAJA MAR	外 YAMAHA	12 p.s	1	
LOS COCOS	外 YAMAHA	12 p.s	1	
TORNABE	外 YAMAHA	12 p.s	3	
SAN JUAN	外 YAMAHA	12 p.s	2	内 1 台 故 障
"	内 LISTER	13 p.s	1	
PARAISO	外 YAMAHA	12 p.s	2	

組 合 名	機 種	馬 力	台 数	備 考
LIMPIRA	外 YAMAHA	12p.S	1	未 使 用
TRIUNFO	外 YAMAHA	12p.S	2	
COPAL	外 YAMAHA	12p.S	1	
"	内 HYATT	13p.S	1	
SAMBO CREEK	外 YAMAHA	12p.S	2	
NUEVA ARMENIA	外 YAMAHA	12p.S	1	
SAN ESTEBAN	内 YAMAHA	12p.S	1	
GUADALUPE	外 YAMAHA	12p.S	1	
TRUJILLO	内 LISTES	13p.S	1	
STA ROSA DEAGUAN	内 YAMAHA	12p.S	1	
LIMON	外 YAMAHA	12p.S	1	
"	外 JOHNSON	15p.S	1	
"	内 YAMAHA	7p.S	1	
計	28台 船外機 船内機	22台 6台		

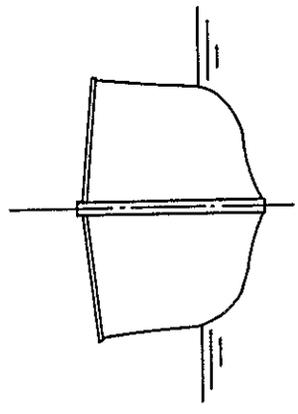
以上は漁業協同組合関係のみであるが、組合以外に個人所有、個人借用の動力船は組合所有数の5～10倍あると推測される。舟の構造、Eng.の取付方法は組合、個人所有とも大差はない。一部には平底型のF.R.Pの船を試験的に使用しているが、これも作業性に欠け且つ船体が軽く波浪に弱く未だ数多の改良を要す。米国の平和部隊がベニヤ板性の舟を数隻建造したが作業性に欠き且つベニヤ板の耐水性が悪く活発に使用されていない。

ホンデュラスは木材が豊富であるので、今後和船型木造舟内機関の沿岸用舟を導入す可きであろう。参考までに現在使用されているカヌーと和船型の改良案とを図13、図14に示した。

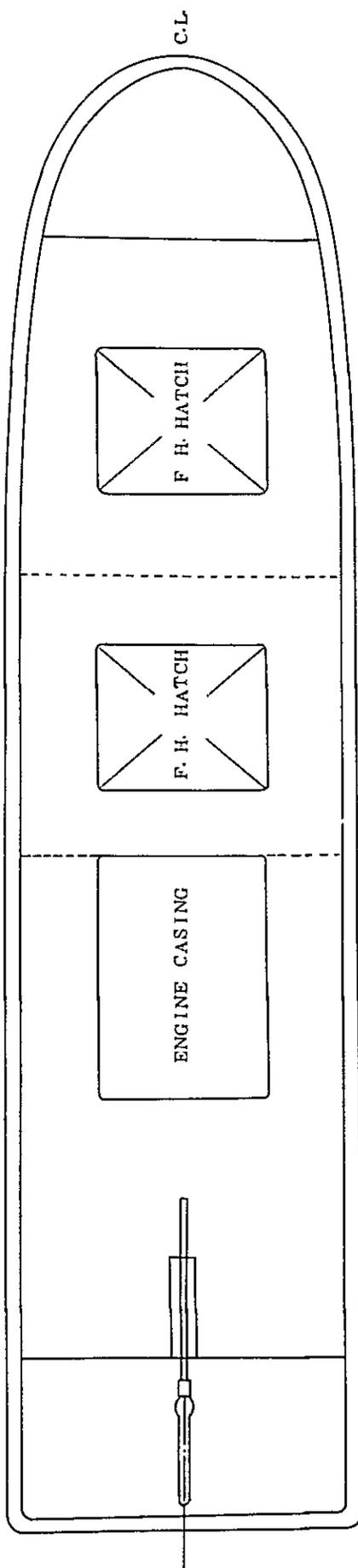
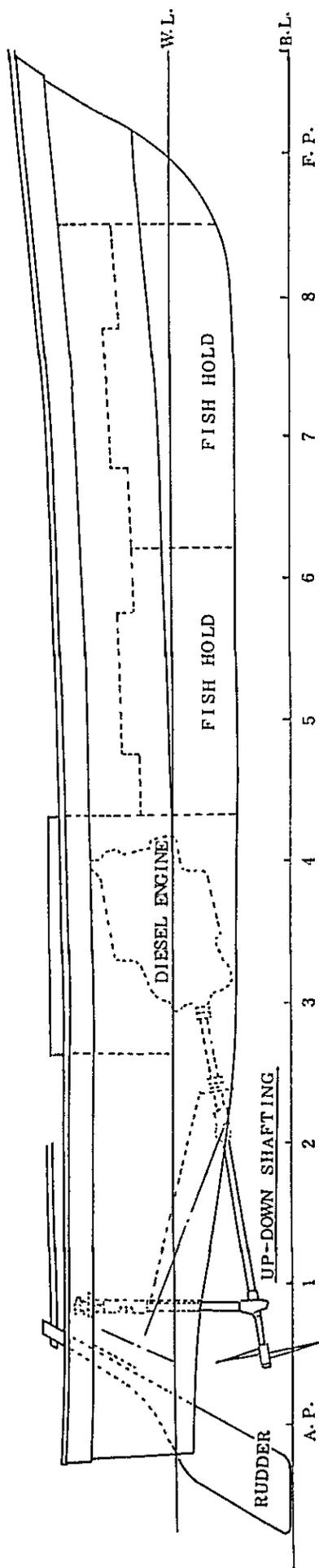


TITLE
 4.5M CANOE TYPE FISHING BOAT
 DATE 3-9-1980 SCALE 1/20 DESIGNER K.M.

LENGTH O.A 4.500 M
 BREADTH 0.600 M
 DEPTH 0.500 M



13



PRINCIPAL DIMENSION

LENGTH OA	7.500 M
BREADTH	1.860 M
DEPTH	0.975 M
WEIGHT	ABOUT 800 KG
FISH HOLD	ABOUT 1.5 CU. M
PROPULSION	MARINE DIESEL ENGINE YANMAR 3QM 30HP/2600 RPM
SPEED	8 KNOTS

CUSTOMER:

TITLE:

7.5M FRP HULL FISHING BOAT

DATE 3-5-1980 SCALE 1/30 DESIGNE K. M.

14

13-4 操業と漁獲（沿岸漁業）

ホンデュラスには正確な漁獲統計が無く且つ沿岸漁業では特定の漁業基地が無く、漁獲物の大部分は地元漁村の自家消費に当てられてその実態を把握するのは困難である。北岸では東部が西部より資源が多く漁獲率は良いとされている。南岸では1日昼間4～5回の刺網を入れて20kg前後の漁獲との事であった。但し月間操業日は平均10日に満たない。北岸では年間4月～10月迄は各地元漁村の地先で操業するが、11月～3月には地元を離れてコチノス島（I. Cochinos）にキャンプ（Camp）を張って島附近の好漁場で大型魚を漁獲して塩干魚を製造する。

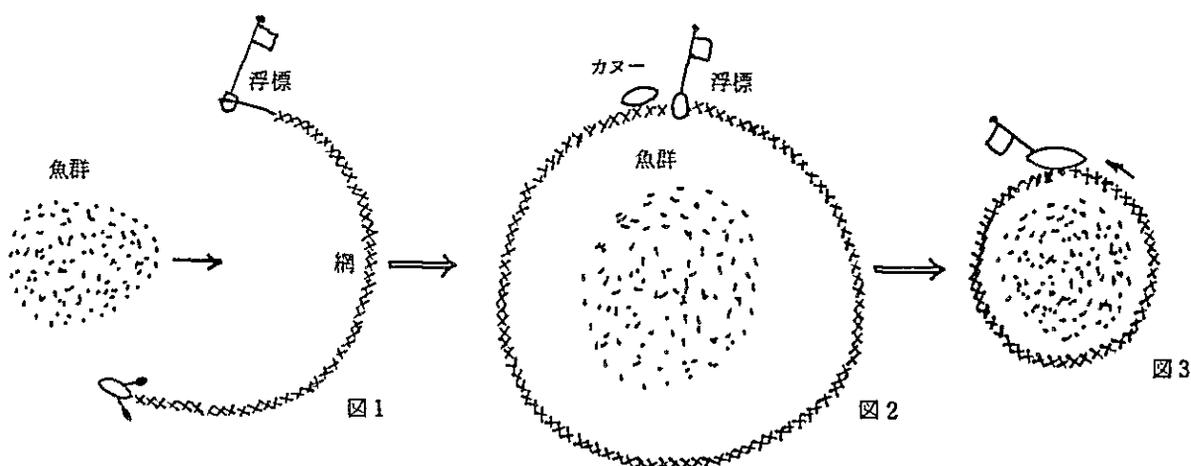
ホンデュラスの沿岸漁業の操業方法は地形、環境等に依り多少の相違はあるが基本的には異なるのでトゥルヒーヨ（Trujillo）組合の状況を記述する。

4月～10月迄の操業は4人1組となってカヌーを使用して操業する。使用漁具は1）底刺網（ナイロンモノフィラメント）、2）まき刺網、3）浮き刺網

1）底刺網：漁具は#277、目合8.12cm、掛目65掛、長さ200～250m縮結50%の物を使用する。底刺網は海底に網を設置してサメ（Tiburón）、ヒラアジ（Jurelito）、サワラ（Macorela）、オキカマス（Barracuda）、グチ（Curbina）、ボラ（Lisa）等を目的として漁獲する。

2）まき刺網

海岸近くで浮上魚群を発見した場合その魚群の進行方向を見定めて魚群を刺網で魚群を包囲する様に投網する（参照第1図）。

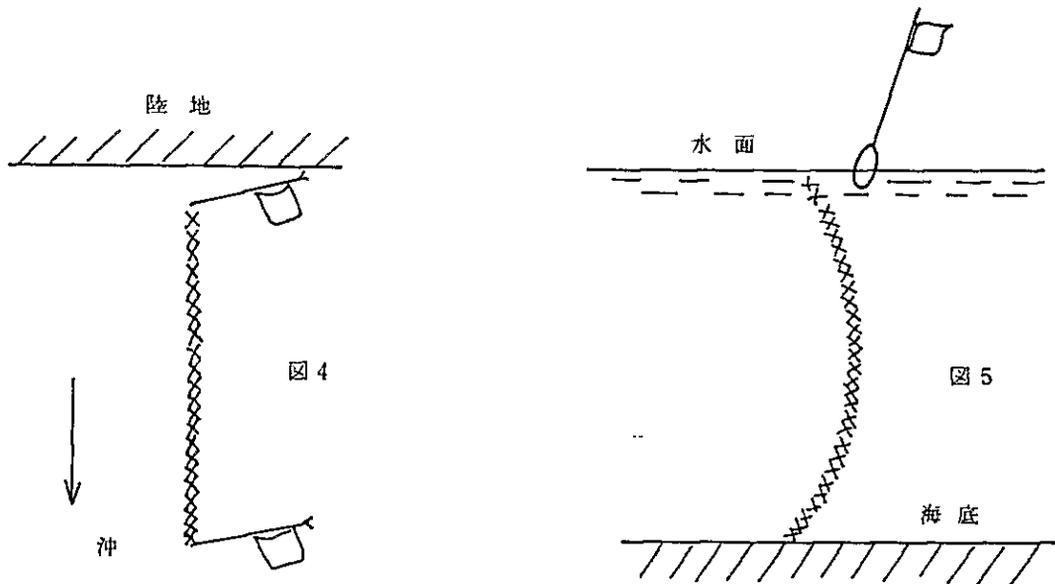


魚群を完全に包囲（参照図2）したら浮標をカヌーに取入れる。その後浮子網をたぐり寄せて、包囲した網の円を小さくする様揚網する。その際カヌーの舷側をたぐいて、網の中の

魚を驚かせて網目に魚が刺さる様にする。揚網する際に刺った魚を取らずして魚を舟内に収容する。

3) 浮き底刺網

夕方から翌朝まで、或は夜中から翌日の午後まで終夜操業を行う。網の投網は海岸から沖に直角に投網し、1時間～2時間網待ちして揚網し又投網し、1晩にこれを3回～5回繰返す。



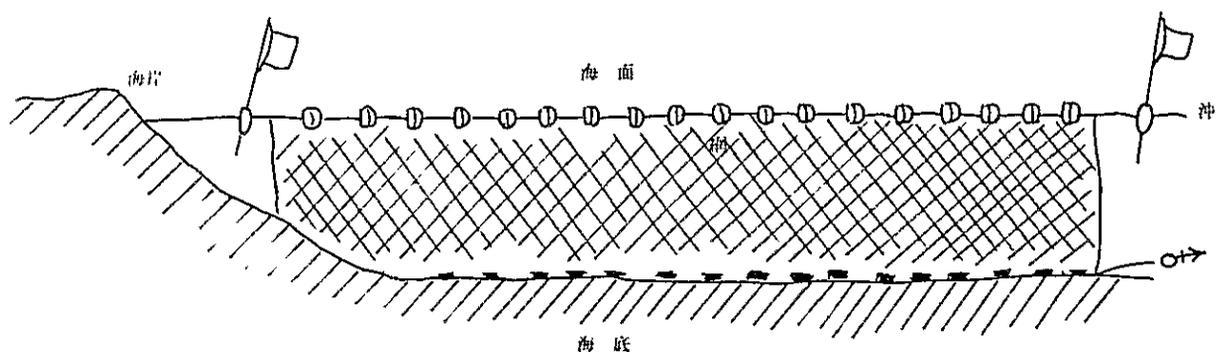
揚網迄の網待ちの間カヌーは網の附近に錨を入れて仮眠する。

この投網は魚が海岸近くを魚群が回遊するとの考えに依る。

この網は底魚、表層魚を漁獲するとの発想に依るものである。

底魚を漁獲する底刺網、浮魚対象の浮刺網（流網）とは漁具の仕様、仕立が違いものであり、且つ投網方法、例えば250mの網を50m切りにして魚群の回遊路に重点的に分散投網する等単純な改善の方法があると思われる。

漁獲に就いては各協同組合共自家消費の割合が多い事、又統計方法の拙劣に依り正確な数字は不明であるが、トルヒーヨ (Trujillo) 漁業協同組合の統計があるので次表に示す。



第 2 表

月	操業日数	漁獲量	1日平均漁獲	備考
1月	13日	801.5kg (1767.0 Lbs)	6165kg (135.9 Lbs)	
2月	12日	1308.0kg (2883.6 Lbs)	10900kg (240.3 Lbs)	
3月	11日	811.2kg (1788.5 Lbs)	73.75kg (162.5 Lbs)	
4月	7日	770.2kg (1698.0 Lbs)	110.03kg (242.5 Lbs)	
5月	13日	811.0kg (1788.0 Lbs)	6238kg (137.5 Lbs)	
6月	12日	1075.3kg (2370.7 Lbs)	8961kg (197.5 Lbs)	
7月	9日	462.3kg (1019.2 Lbs)	51.47kg (113.2 Lbs)	
8月	5日	1278.4kg (2818.4 Lbs)	255.68kg (187.8 Lbs)	
計	92日	7317.9kg (16133.4 Lbs)		
平均	11.5日	79.54kg (175.36 Lbs)		

トウルヒーヨ (Trujillo) 漁業協同組合員は 14 名、カヌー 2 隻内 1 隻は 13 馬力ディゼルエンジン装備している。前表から 1 月～8 月迄の総漁獲高は 7317.9kg(16,133.4Lbs)であり平均魚価を 1 Lbs = 1 Lp → 1kg = 264.55円と仮定すると、水揚げ金額は 1,935,950 円 (16,133.4Lp)となる。月平均 241,994 円 (2,016.7Lp)となる。この 50%を組合から舟、漁具の借料として納付すると、漁民の手取りは 120,997 円 (1,008.4Lp)で仮に 14 名で分配すると 8,643 円 (72.03Lp)となり極めて低収入である。健全な漁業活動する為には少なくとも現在の 2～3 倍の漁獲を揚げる様改善する必要がある。又は組合からの借料は総水揚げの 30%

程度で維持出来る様な水揚増を計る可きであろう。

13-5 漁 場

▽ ホンデュラス国は太平洋（フォンセカ湾）に面した南岸と大西洋（カリブ海）に面した北岸がある。南海岸線は162kmで北海岸線は693kmである。

沿岸漁業の漁場は南部と北部に大別され、各々その漁場の特色を保有している。

1) 南 部 漁 場

南部漁場はフォンセカ湾に面し、漁村としては湾内にある島々にあるアマバラ（Amapala）サン・カルロス（San Carlos）、プンタ・ノヴィリコ（Punta Novillo）、サカテ・グランデ（Sacate Grande）があり、これらの漁村はフォンセカ湾内を漁場としている。陸岸の海岸地帯はマングローブ樹に覆われ、満潮時には海水が流入し、干潮時には湿地帯となる。

フォンセカ湾内は水深10尋以内が大部分で、南部の湾口附近は20尋の水深があるが両岸は東がニカラグア領、西はエルサルバドル領で湾口より沖合はホンデュラス漁場としては使用出来ない。

従って漁場面積は数百 km^2 程度で極めて狭く、水深が浅い点を考慮すればこの漁場の資源量は余り多く期待出来ない。太平洋側は干満の差が5m前後あり、陸岸のマングローブ地帯はこの干満の差に依り海水の流入、流出が多く魚介類の産卵、稚魚介類の棲息場所として適していると云える。

現在の南部漁場では安定した漁獲があるが、これは湾内の海況が比較的平穏であり、小型カヌーでも充分採集可能である為と思われる。従って今後、漁舟の大型化、近代漁具の導入があっても飛躍的漁獲増は望めないと思われる。寧ろ陸岸地帯にあるマングローブ樹地帯の地形、潮汐の干満の差を利用して養殖、増殖業の開発が望ましい。特にエビ、イセエビ類の養殖が有望であろう。』

2) 北 部 漁 場

北部海岸は南部海岸に比較して、割合平坦であって東西に約670kmの長さがある。100尋線迄の大陸棚は距岸10~15哩で、この大陸棚は北東部に拡大しており、ここはエビトロールの漁場となっている。

北部の沿岸漁場は西部より東部の方が資源量が多いとされているが、東部漁場には未開の漁場が数多く存在する。又北岸には河川が数多く海に流入していて、この河口附近は好漁場とされている。北部沿岸漁場は、コルテス（Cortes）地域、テラ（Tela）地域、セイバ（Ceiba）地域、トゥルヒーヨ（Trujillo）地域に4大別される。

コルテス（Cortes）地域沖漁場（参照北岸漁場図15）

ホンデュラス北岸最西部の漁場でベェルト・コルテス (Puerto Cortes) を中心として、西方はグアテマラ国境迄であって、オモア (Omoa) からマスカ (Masca) を経てガテマの国境迄の湾内の漁場である。100 尋線迄の大陸棚は距岸 10 ~ 15 哩と他海域に比較して広い漁場である。海底は平坦で底質は砂泥で底曳網、外曳網漁場に適している。グアテマラとの国境附近を流れるモタグア河 (R. Motagua) 口附近には魚群の寄る未開の好漁場である。

ベェルト・コルテス (Puerto Cortes) 沖 ~ バハマル (Bahar) 沖は遠浅であって 100 尋線附近で急深となっている。この漁場には 5 ~ 10 尋の瀬が点在して、瀬付底魚の良い棲息場所であり、今後、数本の釣鉤を持つ深手釣、立縄、底専用の刺網の外イセエビ用籠、巻貝の好漁場となる可能性がある。

テラ (Tela) 地域沖漁場 (参照北岸漁場図 16)

ユニオン・ノルテーニヤ (Union Nortena) 漁業協同組合連合会地域沖漁場である。漁場はテラ (Tela) 湾を中心として、沖合 10 ~ 15 哩が主漁場で随所に瀬があり、底魚の好漁場と思われる。この漁場は瀬が多在するので底曳漁業には不向きである。

従って底刺網、立縄、深手釣、エビ籠漁業等が有望であろう。但し、この湾口は北東に開口している為、常風の東北東風を受けるので波立ちが多く、使用舟は小型でも耐波性のある舟を使用する必要がある。

ラ・セイバ (Le Ceiba) 地域沖漁場 (参照北岸漁場 16)

ホンデュラス北岸中央部にある漁場である。海岸線は湾曲が少なく砂浜となっている。海底は砂地で底曳網漁業地並びに曳網類の操業に適する。

この漁場の東側に小さい島 (Cochis) が点在する。その島々の附近に魚の寄る瀬が多く存在して、ホンデュラス北岸の最良の漁場となっている。この漁場には 11 月 ~ 3 月迄、ラ・セイバ (Le Ceiba) 附近の漁民の外テラ (Tela) 方面の沿岸漁民多数が移転し、この島々の附近の漁場で大型魚を主体として漁獲して、この島で塩干製品を製造している。この島には設備らしい設備はないが漁民はキャンプをしてこの期間漁業に従事している。各地区の漁民が一定期間漁民が集結する例は他漁場には見受けられない。従ってこの漁場はホンデュラス唯一の重要漁場である。ラ・セイバ (Le Ceiba) 漁場の沖合にはエビトロール漁業基地のロオアタント島、グアナジャー島があり、260 隻のエビトロール漁船が活発な操業している事は注目すべきである。

トゥルヒーヨ (Trujillo) 地域沖漁場 (参照北岸漁場 16)

トゥルヒーヨ (Trujillo) 漁場は魚介類資源の豊富な漁場である。

トゥルヒーヨ湾は湾口が西方に開いていて、この地方に常に吹く偏東風の影響は殆んど受けず、湾内の海況は平穏で小型舟の操業に適している。湾内は海底砂地であって、西方には

瀬があって、漁場環境は良好である。漁場は外海(P.Caxinasの沖合)にも続いているが、現在はこの漁場では操業されていない。外海の海岸にリモン(Limon)及びサンタロサデアグアン(Santa Rosa De Aguan)の漁村があるが、この2漁村は交通の便が極めて悪く漁獲物は殆んど自家消費されている。2漁村の沖にある外海の漁場の活用は耐波性のある大型船(5~10 吨)で操業し、漁獲物は自船でプエルトカスティーリヤ(Puerto Castilla)に運搬流通機構に乗せる様にすれば、ホンデュラス国唯一の漁場として発展する漁場である。

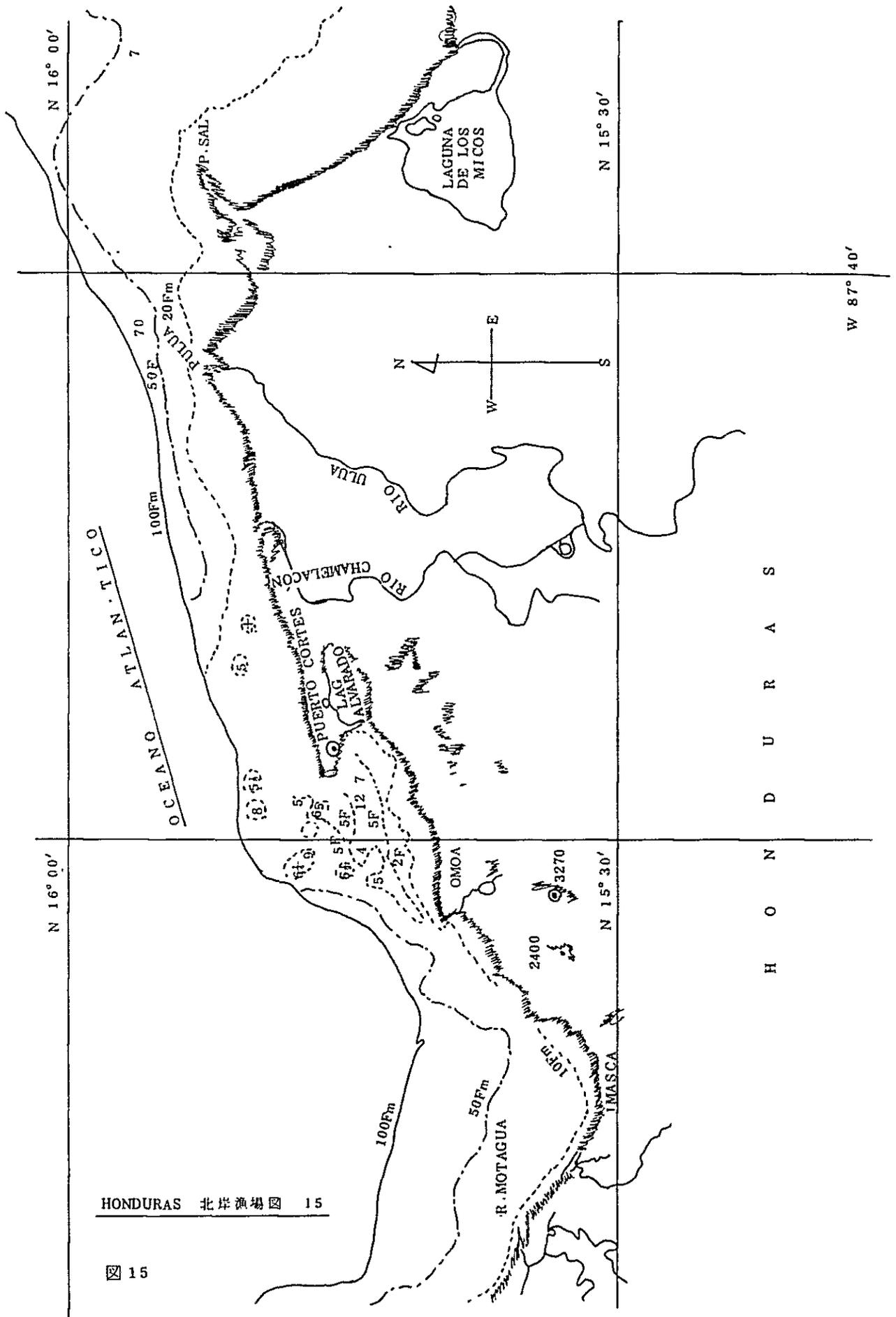
その他漁場

コロン(Colon)州の東部グラシアスアディオス(Gracias A Dios)州の北東に拡大な大陸棚が存在している。この大陸棚はホンデュラス国の経済水域に包含され、南部はN15°00'線でニカラグアの経済水域に続いている。この大陸棚の中央部はトゥルヒーヨ(Trujillo)から100哩以上の距離があって小型船での出漁は無理であって、現在はエビトロール船の操業漁場であり、エビ、イセエビは豊富である。エビ船では網に入った一般魚は殆んど海中に放棄され、その実態は不明である。沿岸漁民群が強力に組織され、この漁場での一般魚を漁獲操業する事はホンデュラス漁業の一大発展に連る有望漁場である。

以上ホンデュラス国沿岸漁場に就いて述べて来たが、これを総括すれば南部湾内漁場は現在比較的好漁ではあるが、漁場の状況から今後急速な拡大は望めない。

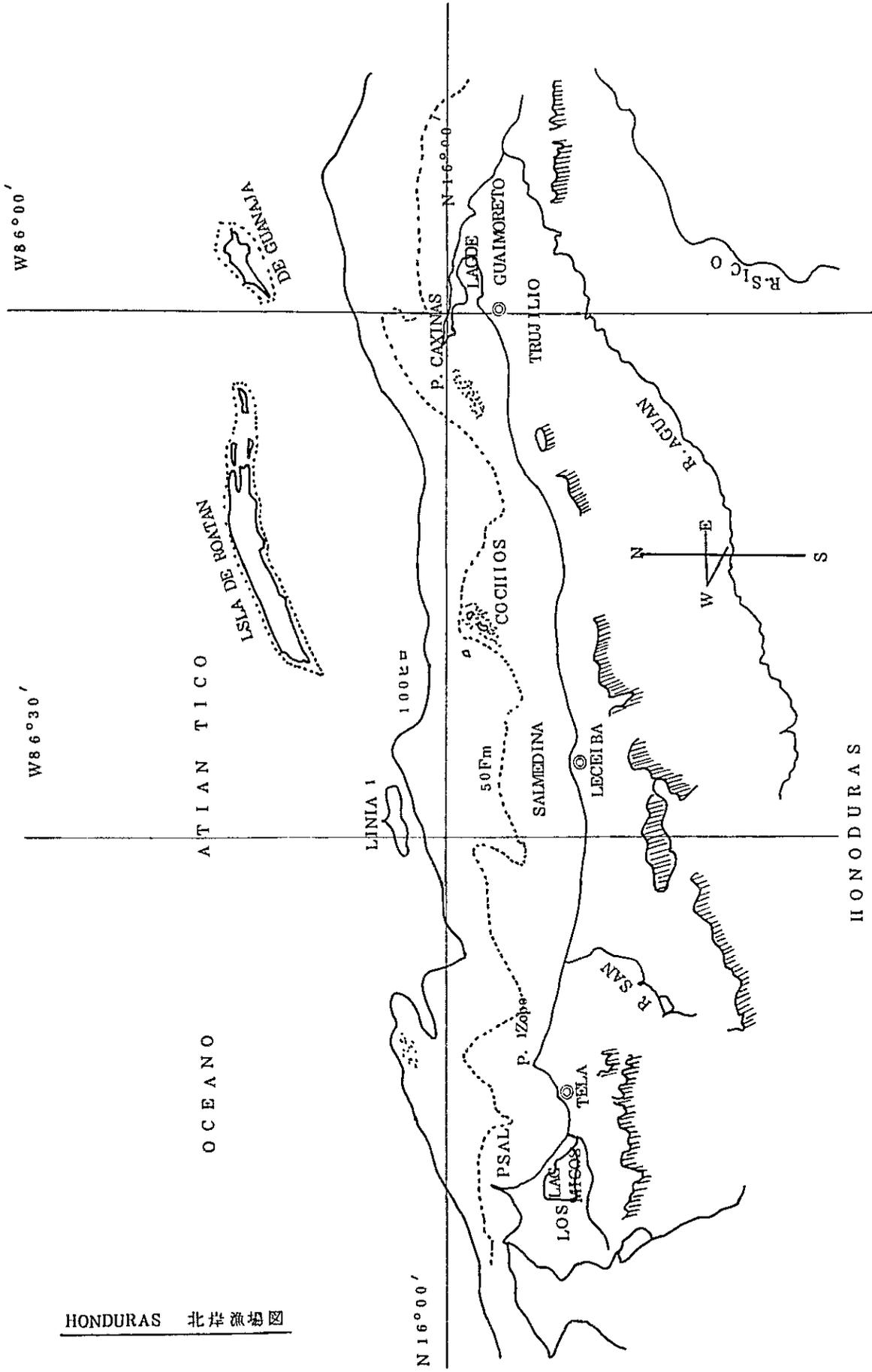
北岸は西部より東部の方が資源が多く、今後の開発が望まれる。但しテラ(Tela)沖の瀬、ラ・セバ(Le Ceiba)東方の小島とその附近の瀬は有望な漁場であろう。

ラ・セバ(Le Ceiba)からトゥルヒーヨ(Trujillo)附近迄の海底砂地は小型底曳の良い漁場である。なお、北岸漁場図を図15、図16に示す。



HONDURAS 北岸漁場圖 15

圖 15



HONDURAS 北岸漁場図

13-6 ラグーン（湖沼）漁業

ホンデュラス国北海岸附近の河川口附近には大小数のラグーンが存在する。その代表的なものはトゥルヒーヨ（Trujillo）附近にグアイモレト湖（Laguna de Guaymoletto）があり、テラ（Tela）附近にはロス・ミコス（Laguna de Los Micos）湖がある。

ラグーンのある沿岸漁業は殆んどがラグーン内の漁業を行っており、沿岸漁業の漁獲高の半数以上がラグーン内での漁獲したものである。ラグーン内は海況が平穏で4～5mの小型カヌーでも充分操業出来る事、海面漁業より漁場選定が容易である。

ラグーン内では刺網漁法と手釣漁法である。刺網は資源保護の為目合3/4"（8.25cm）以下の網の使用を禁止している。ロス・ミコス（Laguna los Micos）湖では1日500名の漁民が操業している。何れのラグーンも水深は最深部で2m位で浅い所は0.5mで船外機舟の航行が危険である。又海と連絡口は土砂が蓄積されて海水との水の交流は充分でない。カリブ海は干満の差が小さい事も水の交流を悪くしている。

従ってラグーン内の漁場環境は良くなく、資源量には限度があると思われる。

ホンデュラス国北東部にも拡大なラグーン群が存在しているが、全くの未開であり、交通の便がなく附近住民が自家消費程度が利用しておらず、漁業とは云えない。この開発は交通運搬方法を確立する事が必要条件である。

13-7 企業の漁業の概要

ホンデュラスの企業の漁業はエビ、イセエビのトロール、エビ籠（木製箱）漁業である。この漁業は株式の漁業会社で運営されている。これらの漁業会社の大部分は米国系資本に依る合併会社である。但し、実態は外国側（米国側）に経営の主導権がある。之等の会社の基地ロアタン島（I. Roatan）に3社、グァナジャ島（I. Guanaja）に3社、本土のプエルト・カスティージャ（Puerto-Castilla）に1社がある。エビ、イセエビ船は総隻数280隻が許可されているが稼働しているのは260隻程度である。1社の保有隻数は10～50隻であるが、エンジンのトラブル等に依って各社とも全船稼働する事なく2～3隻は常に基地に係留されている。船は全長22.5m（73'）馬力350馬力程度の船が主体で、船質は鋼船もあるが木質の古い船も可成見受けられる。船内設備は氷蔵船が多いが最近は簡単なが凍結設備を備えた船も出現している。一航海は4日間位で漁場は北東部にある大陸棚であるが、その南部のニカラグア側が好漁場である。

13-8 操業及び漁獲（企業の漁業）

トロール漁法は“ダブルリガー”方式で両舷に各々1ヶづつを曳網し、船尾から小型テスト

網を曳網する。網の大きさはヘッドロープの長さが15.24m(50フィート)である。曳網時間は3時間曳きであるが夜間は6～10時間で大体2回曳網である。その間30分毎にテストネットを揚網して漁獲物の入網状況を推定する。揚網すれば、エビ類、イセエビ類を選別して漁船内に保管するが魚類の大部分は海中に放棄している。

ホンデュラのエビ漁業の操業は50年前から行われていたが、本格的操業は1950年頃からとされている。その間基地の充実、船の近代化に依って今日の盛況をもたらした。

最近、漁獲されるエビの魚体が小型化して、資源の減少傾向にある為1979年には2月15日から5月31日迄の3ヶ月半を禁漁期とし、1980年度は2月15日から4ヶ月を禁漁期となる。イセエビに就いては禁漁期間はないが、10cm以下小型エビと包卵エビの漁獲は禁止されている。エビの禁漁期間は各船籠(箱)でイセエビ漁に従事する。

現在の漁場はホンデュラス本土の北東海域の大陸棚であるが、今後ニカラグア側の漁場で操業出来れば、漁獲の増大が見込まれる。

資本漁業(エビ)の漁獲物の大部分が米国に輸出されていて、その漁獲量の実態は不明確である。ホンデュラスの輸出通関量と米国の輸入通関量では米国の通関量が多いと云われている。

ホンデュラス国政府の統計に依る全魚種の漁獲量は次表の通り。

第 3 表

単位 = M/T

年 度	1975	1976	1977	計	平 均
エビ類	2,593.6	2,632.0	3,508.9	8,734.5	2,911.5
イセエビ類	2,298.5	2,156.6	2,115.3	6,570.4	2,190.1
魚類	484.5	464.5	893.5	1,842.5	614.2
その他海産物	144.9	145.2	279.2	569.3	189.8
計	5,521.5	5,398.3	6,796.9	17,716.7	5,705.4

第4表 魚種別比率

%(100分比)

年度 魚種	1975	1976	1977	平均	備考
エビ類	46.97	48.76	51.63	49.30	
イセエビ類	41.63	39.95	31.12	37.09	
魚類	8.77	8.60	13.14	10.40	
その他海産物	2.63	2.69	4.11	3.21	
計	100.00	100.00	100.00	100.00	

以上の表では3ヶ年平均の年間漁獲量はエビ類が2,911.5M/Tイセエビ類は2,190.1M/Tである。全漁獲量はエビ49.30%、イセエビ37.09%で計85%になっている。この2種類は魚価が高く、水揚金額では95%を示し、ホンデュラ国漁業の重要部門である。但し現況以上に発展拡大は期待出来ない漁業である。

統計数字が不確実である点を検討する為、スペイン調査団が60日間の資源調査の資料と比較して見る。

スペイン調査船に依る漁獲量データ

ラ・セイゼ(Le Ceiba)沖で1回の曳網時間4時間、3回操業の結果

一網当たり、輸出用エビ224.52kg、小型エビ680.3kgと痛んだ現地売870.9kgの外魚類を2,721.55kgの漁獲(実際は海中に放棄した)した。輸出用エビのみで検討すると、3回操業で224.52kg×3回=673.56kgとなる。年間200日操業として134,712kgとなる。

統計数字を見ると、

1977年の年間エビの漁獲量3,508.9M/Tで仮にこれを260隻の船で獲たとすると13,495kgとなる。200日操業として1日の漁獲量は67.75kgとなる。統計数字はスペインの調査資料の1/10である。外に小型エビ680.3kg+傷エビ870.9kg=1,551.2kg年間とすると、1隻当たり31,024kgが表面に出ない数字である。現地調査の際年間1隻当たり漁獲高は120M/Tとの数字を得ており、公的統計数字は実態と大差ある事が判断される。

尚、一般魚類を1夜で2,721.52kg×3回=8,164.86kgの漁獲があり、この資源は沿岸漁業の貴重な資源である。

13-9 水産加工

ホンデュラスの水産加工は極めて幼稚である。現在行われている加工は大別して、エビ漁業

で漁獲されたエビ，イセエビを冷凍加工するのと，沿岸漁業で漁獲された大型魚を塩干加工するものと2大別される。

1) 冷凍加工

エビ船で漁獲されたエビ，イセエビの氷蔵，凍結品共に基地冷蔵庫に持込まれて，凍結品は解凍して，7階級の大きさに選別（5Lbの小箱に何尾入るかで区別）されて小冷凍パン（5Lb）に入れて，コンタクトフリーザで凍結する。サイズの選別は総て機械で行われ，冷凍パンに入れる作業は人手に依って行われる。凍結後小函は15Lbの大函ダンボール函に入れて冷蔵庫に保管される。冷蔵庫の収容能力は15Lb函4,000ケースを保管出来る程度の冷蔵庫を2庫を備えている。冷凍製品は殆んど米国に輸出されるもので，製造行程は補生的で製品は良好である。

2) 塩干品の製造

ホンデュラスはカトリック教の国である為，4月中旬の聖週間には肉食を断つ習慣がある。従って，この週間には代替として魚肉を食する。この期間に魚価が急上昇する。漁民はこの時期に魚類を販売する様貯蔵するが，エビ基地以外に殆んど冷蔵設備が無いので，塩干製品にして貯蔵を計るものである。従って塩干品の製造は聖週間前に出荷出来る様に製造されるもので，それ以外の時期には塩干品の製造は行われていない。

ホンデュラスの沿岸漁民の大部分は1月上旬に家を離れて魚が良く獲れる漁場の海岸にヤシの葉で造った簡単な小屋に寝泊りして，魚を獲り，その魚を原料として塩干魚を製造する。

魚を獲る漁具はナイロン，綿の刺網を使用する。製造の主たる対象魚は大型魚で魚種は鮫，スズキ（Robalo），サワラ（Macarela），ヒラアジ（Jurel），海ナマズ（バカラオ），（キングフィッシュ），（ミフクル）等である。塩干製品の価格は重量で決められ，魚種，形，大きさ，外観には関係はない。従って製造過程で鮮度維持油焼け防止等には特別の配慮はしていない。市場に出廻っている製品で油焼け，変形等が見受けられるが，価格には格差がない。

塩干製品の原価（トウルヒーヨ（Trujillo）の製品

歩留，用塩量を次表に示す。

第 5 表

原魚 回	鮫	バカラオ	エ イ	マカレラ	計	用 塩	
						量	%
㊦1	50.8	11.1	25.5		87.4	11.2	12.8
㊦2	169.5				169.5	22.8	13.45
㊦3	39.8		24.4		64.2	7.1	11.06
㊦4	43.5	38.0		40.1	120.6	15.0	12.44
計	302.6	49.1	49.9	40.1	441.7	56.1	12.70
製 品	14044		26.63	18.56	185.63		
歩 留	46.4%		53.35%	46.25%	42.03%		

単価 塩干品→2 LPS/Lb, 原魚→0.55 LPS/Lb, 塩→0.15 LPS/Lb として計算する。

塩干品 A	鮮 魚 B	比 率	備 考
売上高 $185.63 \text{ Lb} \times @20 \text{ LPS} =$ 37126 LPS	売上高 $441.7 \text{ Lb} \times @0.55 \text{ LPS} =$ 24294 LPS	$A/B \times 100$ 152.8%	製造労務費を除外して
経 費 原魚代 = 242.94 LPS 塩代 $56.1 \text{ Lb} \times @0.15$ = 8.42 LPS 計 251.36 LPS			
販売手数料 $37126 \text{ LPS} \times 5\%$ = 1856 LPS	販売手数料 $24294 \text{ LPS} \times 5\%$ = 1215 LPS		
差引手取 101.34 LPS	差引手取 230.79 LPS	$A/B \times 100 = 43.91\%$	

塩干製品として販売した場合は単純計算で10134LPS即ち43.91%の増収となる。

原魚の魚価代の分岐点は、

$$230.79\text{LPS} + 10134\text{LPS} = 33213\text{LPS} \quad x \times 0.95 = 33213\text{LPS} \quad x = 34961\text{LPS}$$

$34961\text{LPS} / 441.7\text{Lb} = 0.79\text{LPS}$ 即ち塩干品が2LPS/Lbで販売する場合原魚代平均魚価が0.79LPS以上の場合は鮮魚で販売した方が有利となる。但し塩干品は貯蔵が出来る有利性がある。即ち魚価の高い時期を見て販売出来る。

ホンデュラスは4月上旬の聖週間には肉食を摂らず、魚食を行う習慣があるので、この直前には魚価が急上昇する。従って11月頃から3月末迄塩干製品を製造し、4月上旬に販売する事は適切であり、カリブ海海岸の漁師は11月～3月には塩干品を作る事が習慣となっている。今後の製造技術を向上させて、より効率的により良い製品を作る必要がある。

14. 漁業生産の状況

ホンデュラス共和国における漁業生産量は第17図に示すように、1960年より62年頃にかけては600から700トン程度でほぼ一定の漁獲量を維持していたが、64年頃より71年頃にかけて年平均約480トンの増加率をもってほぼ直線的に増加し、1964年の漁獲総量1,007トンより1971年の4,369トンにまで達した。その後、72年より74年にかけては4,100トン程度の生産を保っていたが、75年より78年にかけて、年により多少の変動はあるものの再び急増の傾向を示している。図でも明らかなように、同国の漁業生産量の主体をなすものはエビ・イセエビ類であって、1971年においては、全体の約92%、78年においては約78%を示めている。これらエビ・イセエビの甲殻類は、後述するように沖合資本漁業のエビ・トロール船団によって漁獲されているものである。

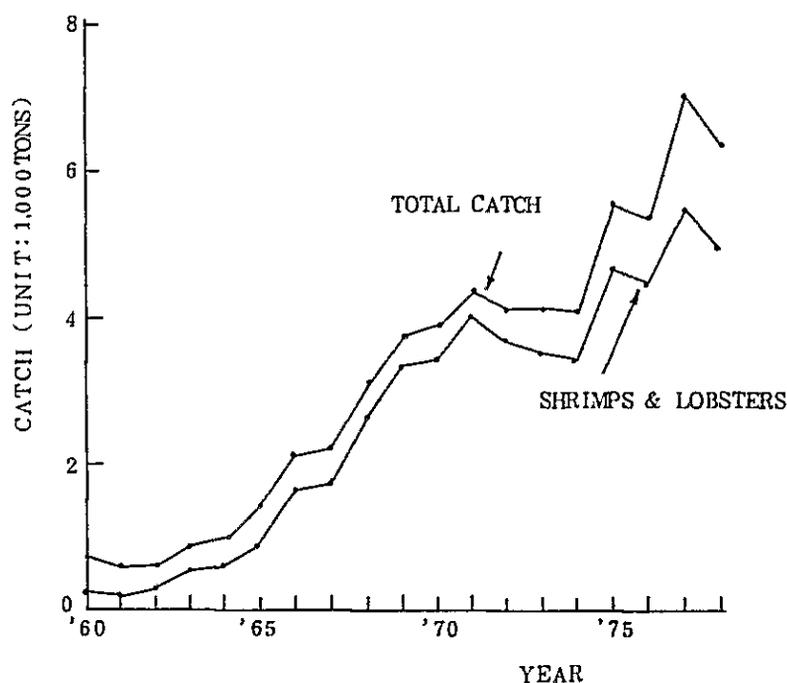


図17 TREND OF TOTAL CATCH AND THAT OF SHRIMPS AND LOBSTERS, 1960-1978

さて、先ほどの1960年より78年にかけての資料を漁獲種類別にエビ類、イセエビ類、魚類及びその他に大別して見てみると(第18図)、エビ類の漁獲は64年頃より急増し、64年の564トンから69年の3,088トンまでその間直線的傾向をもって上昇している。69年以降は、年により増減はあるが顕著な伸びは認められず、生産はほぼ頭打ちの状態にある。一方、イセエビ類についてみると、69年まではゆるやかに増加していたが、70年、71年では夫々1,225

トン及び885トンのレベルまで増加した。72年、73年では生産量は再び下落したが74年より上昇して、75年には2085トン、78年には2544トンとエビ類の生産レベルにまで上昇してきた。この75年以降のイセエビ類の急激な生産量増加は、近年のエビ生産の頭打ちによって沖合資本漁業がその狙いをイセエビ類の方に転換してきたためのように想像される。魚類の生産は近年伸びてきているが、77年に至ってようやく1000トンのレベルを超えたにすぎない。また、その他の項は後述するようにその主体は貝類などの軟体動物であるが、近年増加の傾向にあるとはいえまだ200トンから300トンの域を出ていない。後に詳しく述べるが魚類の生産は沿岸零細漁業によってその大部分があげられている。

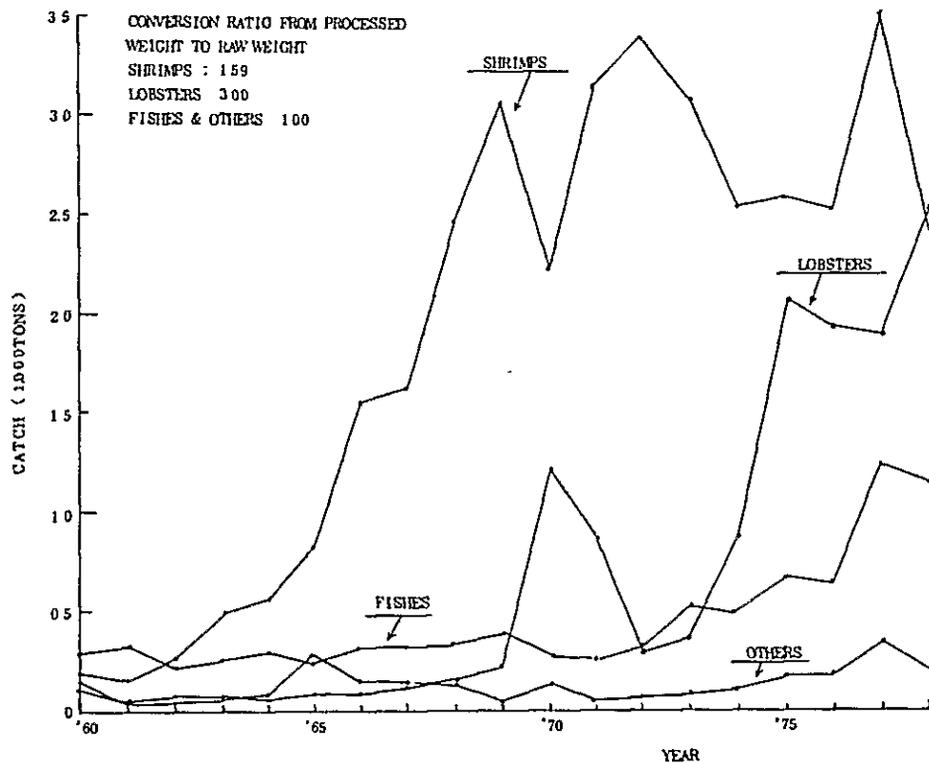


図18 CATCH IN SHRIMPS, LOBSTERS, FISHES AND OTHERS, 1960-1978.

いままで述べてきたように、ホンデュラスの漁業は100トン型のダブル・リガーを備えたエビ・トロール船による大西洋側での近代式沖合資本漁業と丸木船を用い距岸100m程度の水域で主として手釣による原始的な沿岸零細漁業とはっきり二分出来る。そして、沖合資本漁業がその狙いを魚価の高いエビ・イセエビ類に求めているのに対し、沿岸零細漁業ではその生産の大部分を魚類によっている(第6表)。また、沖合資本漁業では漁獲物の処理・加工の面でも近代的な設備を用いて鮮度の保持につとめているのに反し、沿岸零細漁業では処理・加工の技術も極めて原始的でわずかに塩干魚が作られているにすぎず、その漁獲物の大部分は鮮魚の状態で見隣都市で消費されている。第6表には、1977年及び78年における漁獲類別・漁業型態

別の漁業生産量(トン)を示している。なお、参考のため、同表には漁業型態別に各年度についての売上げ高(US\$)をも附記した。この表における漁業生産量が先に示めた第17図及び第18図の同年度における生産量と数値が異なるのは第6表では処理・加工を施された製品重量で示されているのに対し、第17図及び第18図では漁獲時における生体重量で示されているためである。製品重量と生体重量との関係は、魚種によって異なり、エビ類では製品化された無頭エビの重量×159をもって、またイセエビ類については同様に無頭イセエビの重量×300をもって夫々生体重量を表すものと定められている。魚類及びその他については製品重量と生体重量との間に差がないものとされている。いずれにしろ、同表でみるかぎり77年及び78年を通じて沖合資本漁業は製品重量において同国漁業総生産量の約70%近い生産をあげ、売上げ高において総額の95%に達する実績を示している。

第6表 漁獲種類別・漁業型態別漁獲量 1977-1978

種 類	1977			1978		
	計	沖合資本漁業	沿岸零細漁業	計	沖合資本漁業	沿岸零細漁業
淡水魚類	(Ton) 77.5	—	77.5	(Ton) 84.0	—	4.0
海産魚類	1,173.3	80.6	1,092.7	1,089.5	17.15	918.0
甲殻類	2,936.6	2,823.7	1,12.9	2,450.5	2,306.0	144.5
淡水エビ	19.5	19.5	—	18.7	18.7	—
カニ	73.9	—	73.9	54.5	—	54.5
イセエビ	652.2	652.2	—	849.9	849.0	0.9
大西洋エビ	2,136.0	2,136.0	—	1,436.0	1,425.6	1.04
太平洋エビ	55.0	16.0	39.0	81.4	12.7	68.7
渡りガニ	—	—	—	10.0	—	10.0
軟体動物	262.0	176.3	85.7	144.4	72.2	72.2
巻き貝	173.0	173.0	—	62.5	62.5	—
二枚貝	7.6	—	7.6	8.5	—	8.5
イカ	3.3	3.3	—	9.8	9.7	0.1
赤貝	78.1	—	78.1	63.6	—	63.6
小計	4,449.4	3,080.6	1,368.8	3,768.4	2,549.7	1,218.7
海ガメの卵	3.1	—	3.1	4.9	—	4.9
計	4,452.5 (100%)	3,080.6 (69%)	1,371.9 (31%)	3,773.3 (100%)	2,549.7 (68%)	1,233.6 (32%)
金額	(US\$) 15,901,199.0 (100%)	15,096,647.0 (95%)	804,552.0 (5%)	(US\$) 16,297,486.5 (100%)	15,404,236.0 (95%)	893,250.5 (5%)

なお、沿岸零細漁業では漁獲量のうち各漁村内部での消費量も相当なものと考えられるが、これについては統計資料に計上されていないと想像されるし全体の何割に及ぶかも明らかでない。沖合資本漁業の場合でも、その主たる輸出先であるアメリカ合衆国で調査したところ、1972年より74年に至る期間のホンデュラスから同国へのエビ類輸入量に比べホンデュラスの税関へ報告された輸出量はその38%という過少申告であったという経緯もある。統計数値の信頼性について言及する訳ではないが、これらの点については一応留意しておく必要がある。

1978年の資料を用いて、漁業型態別に毎月の総漁獲量を見てみると(第19図及び第21図)、沖合資本漁業ではその漁獲量の主体であるエビ・イセエビ類によって、また沿岸零細漁業では魚類によって夫々の月別総漁獲量の変動が支配されている様子が明らかである。第20図には、沖合資本漁業によるエビ・イセエビ類を夫々イセエビ類・大西洋産エビ類に分けて漁獲量曲線を示している。イセエビ類では月によってその生産量にあまり大きな変動はないが、エビ類では変動が大きい。なお、3月より5月にかけて漁獲がないのは毎年2月15日より5月末日までエビ類に対し禁漁期が設けられているためである。

次に、同じく78年の資料によって沿岸零細漁業の月別・地域別の生産状況を見てみると(第22図)、太平洋側フォンセカ湾では季節による変動は少なく50トンから75トンの間でほぼ一定している。これに反し、大西洋側のプエルト・コルテス、アトランティーダ、コロソ及びグラシァス・ア・ディオスの4地区全体の漁獲量曲線は5トンから70トンの範囲で大きく変動している。

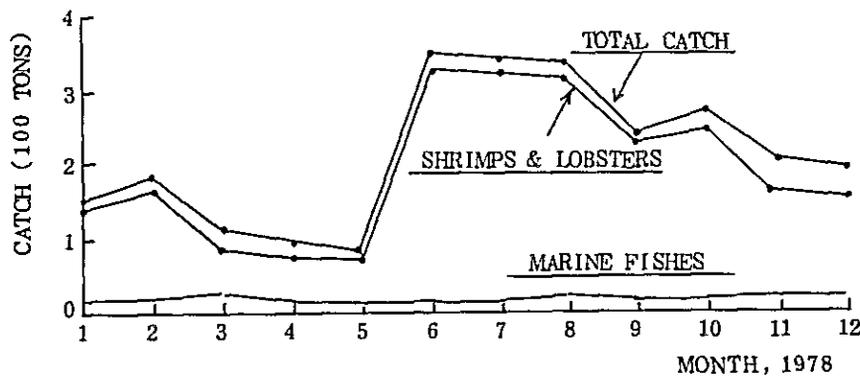
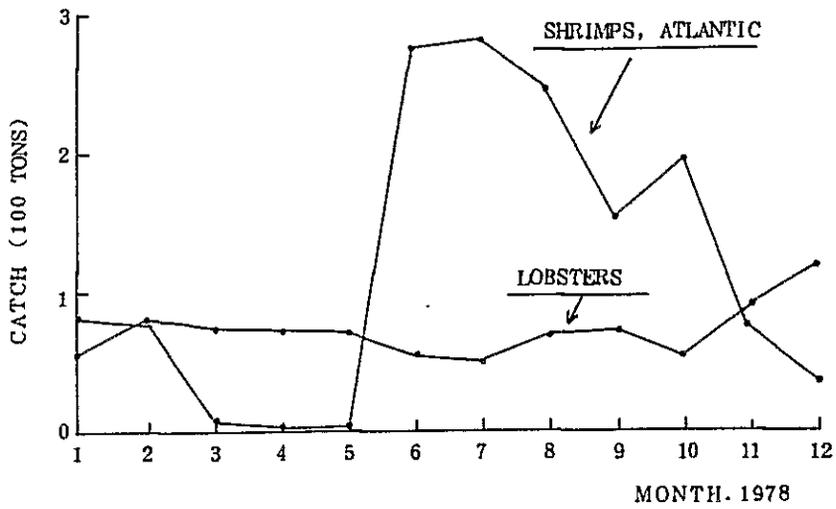
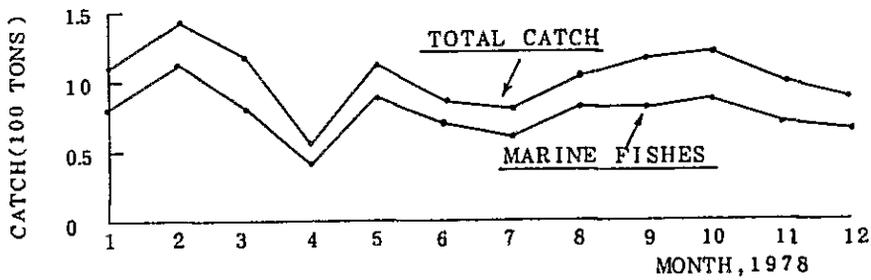


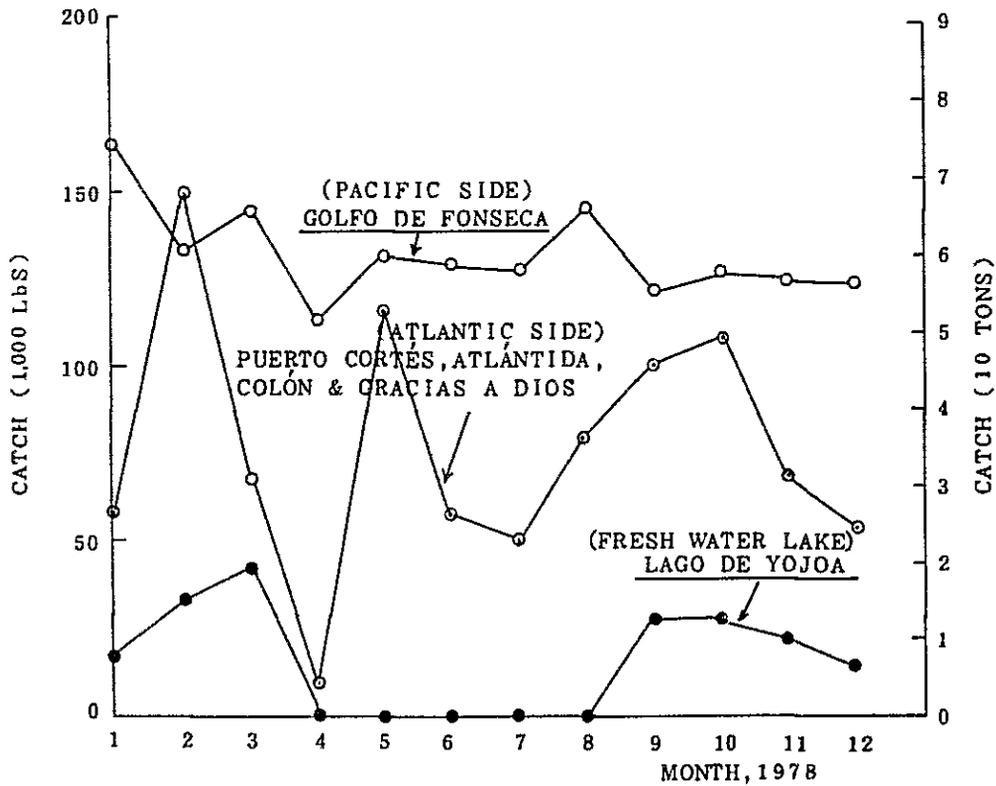
図 19 MONTHLY CATCH BY OFF-SHORE, FISHERY 1978.



☒ 20 MONTHLY CATCH OF SHRIMPS LOBSTERS AND MARINE FISHES BY OFF SHORE FISHERY. 1978.



☒ 21. MONTHLY CATCH OF MARINE FISHES AND VARIATION IN TOTAL LANDINGS BY COASTAL FISHERY, 1978



☒ 22 MONTHLY CATCH IN COASTAL FISHERY BY REGION, 1978

また淡水のヨホア湖では4月から8月にかけて漁獲されていないのが特徴的である。そして78年の沿岸零細漁業による生産量1,224トンの内、太平洋側フォンセカ湾からは全体の約59%が、大西洋側全体からは約34%が、そして淡水のヨホア湖からは約7%が水揚げされている。フォンセカ湾からの漁獲が過半数を占め、しかも毎月の漁獲量がほぼ一定の水準を保っていることは、この場所が首都のテグシガルバという一大消費地から車で約4時間ほどの近距離にあるためと思われる。またヨホア湖からの漁獲が一定の季節に行われるのは、4月の聖週間

に塩干魚を食する同国の宗教的慣習と関係があるものと考えられる。
~~太平洋~~側の4地区からの漁獲量は月により大巾に変動していることはすでにふれたが、この資料を各地区毎に分けてその漁獲量をプロットしてみると(第23図)、プエルト・コルテス地区では4月と12月を除いて毎月10トンから20トン程度のほぼ一定の漁獲水準を保っているのに反し、他の3地区では漁業活動が特定の季節に集中し、しかもその時期が地区によって異なる傾向が見られる。アトランティダでは8月から10月の期間と12月に漁獲のピークが見られ、コロン及びグラスias・ア・ディオスでは夫々5月及び2月にピークが見られる。そして、これら各地区での漁獲量の大半は上に述べた特定の季節にあげられている。なお、これら4地区は地理的には西側のガテマラ国境近くから東側のニカラグア国境近くまで、ほぼ直線的にプエルト・コルテス、アトランティダ、コロン及びグラスias・ア・ディオスの順に並んでいる。都市は西側に偏して散在するので、当然人口密度は西側に行くほど高くなる。

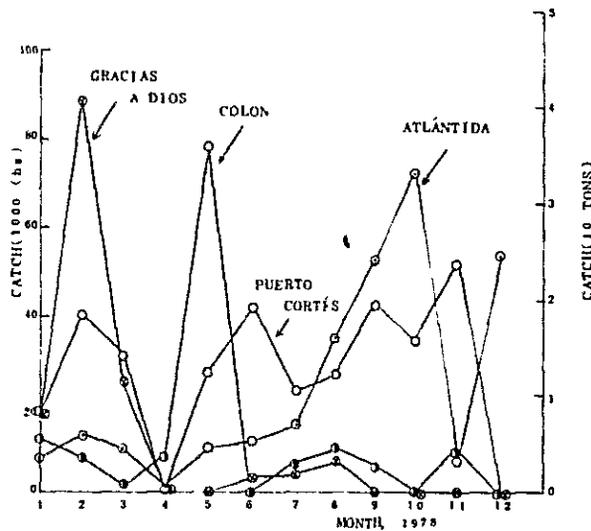


図 23 MONTHLY CATCH IN COASTAL FISHERY
 - ATLANTIC SIDE, BY REGION, 1978

プエルト・コルテス地区で毎月ほぼ一定の水準を保って水揚げがなされているのは、商港プエルト・コルテスから車で約30分程の所にホンデュラス第2の都市サン・ペドロ・スラがひかえていること、無縁でなからう。また東側よりの2地区では、時期は異なるが漁業活動が活発

に行われるのは1ヶ月という短期間であるが、このことは塩干魚の製造と関係があると思われる。

トルヒーヨ以東、コロン地区の大半とグラシアス・ア・ディオス地区の全部、では小部落が散在する程度で人口密度は極めて低く、また陸路による交通も不便な地域であるが、グラシアス・ア・ディオス地区だけでも海岸沿いに西から東に向かってラグーナ・デ・イバンス、ラグーナ・ブルース及びラグーナ・デ・カラタスカといった大型の汽水湖が散在する。現地での情報によると、これらの汽水湖へは他地区から漁民が移動し、数ヶ月間滞留して漁業を営み、製品となった塩干魚を持ち帰るとのことであり、時期は年によって異なるが、10月から12月頃にかけて始まり2月ないし3月頃まで続く。移動は大型船によって行われ、現地でカヌーを借り受けて一定期間家族で漁業及び塩干魚製造に従事しているようである。これらのことを考えると、例えばグラシアス・ア・ディオス地区では統計上2月に漁獲のピークが見られるが、実際には数ヶ月に亘る漁獲の積分量が数値として計上されているのかもしれない。

大西洋側で漁獲される主要魚種のリストは第7表に示してあるが、統計上の処理ではこれらは海産魚類として一括されている。

以上述べてきたようにホンデュラスの漁業はその型態から見て沖合資本漁業と沿岸零細漁業とに明確に二分出来る。これら資本漁業は現在7社の合併企業によって営まれており、全体で280隻のエピ・トロール船の操業が許可されているが、現在操業中のものは260隻と報告されている。

一方、零細漁業で大部分が大西洋及び太平洋岸沿いに散在する村落の漁民によって営まれ、極くわずかに内陸の淡水湖ラゴ・デ・ヨホアでも漁業が行われている。養殖漁業には同国政府も多大の関心をよせており、すでに実施されているもの、計画中のものといくつかのプロジェクトが見られるが、いずれも実験段階であって未だ産業としての段階には至っていない。

表 7.

LISTA DE PECES CLASIFICADOS Y CATALOGADOS EN CEIBA

<u>FAMILIA</u>	<u>ESPECIES</u>	<u>NOMBRE COMUN</u>
POLYNEMIDAE	<i>Polydactylus virginicus</i>	barbón
BROTULIDAE	<i>Brotula barbata</i>	pez lengua
PRIACANTHIDAE	<i>Pseudopricanthus sorrula</i>	pez turco
TRIGLIDAE	<i>Prionotus punctatus</i>	pez valador
UROLOPHIDAE	<i>Urotrygon mundus</i>	raya
SCIAENIDAE	<i>Menticirrhus martinicensis</i>	corvina
CARANCIDAE	<i>Hemicaranax amblyrhynchus</i>	jurel
HOLOCENTRIDAE	<i>Helocentrus ascensionis</i>	tacantone
ESPARIDAE	<i>Archesargus aries</i>	pez pluma
OPHIDIIDAE	<i>Lepophidium profundorum</i>	pez tira
MUGILLIDAE	<i>Mugil brasiliensis</i>	lisa
SPHYRNIDAE	<i>Sphyrna tiburo</i>	tiburón martillo
CLUPEIDAE	<i>Opisthenema oglinum</i>	sardinas
CARANGIDAE	<i>Caranx hippos</i>	palometas
BOTHIDAE	<i>Synacium micrurum</i>	pez hoja o lenguado
SCIAENIDAE	<i>Micropogon furnieri</i>	corvina
ELOPIDAE	<i>Elops affinis</i>	macabí
ANTENNARIIDAE	<i>Rhrnelex scaber</i>	pez sapo
SCORPAENIDAE	<i>Scorpaena pannosa</i>	bucaro
MULLIDAE	<i>Upeneus parvus</i>	pez cabro
RACHYCENTRIDAE	<i>Rachycentron canadus</i>	bacalao
SCORPAENIDAE	<i>Scorpaena pannosa</i>	bucaro
SCIAENIDAE	<i>Ophioscion venezuelas</i>	corvinas
CYNOGLOSSIDAE	<i>Symphurus plaguisa</i>	pez lenguado o pez hoja
CARANGIDAE	<i>Chloroscombrus chrysurus</i>	jurel
SCIAENIDAE	<i>Ophuoscion venezuelae</i>	corvina china
POLYNEMIDAE	<i>Polydactylus virginicus</i>	barbón
SCIAENIDAE	<i>Menticirrhus panamensis</i>	corvina
SCIAENIDAE	<i>Menticirrhus martinicensis</i>	corbina salmonete
SERRANIDAE	<i>Conioplectrus hispanus</i>	calale
POMADASYIDAE	<i>Haemulon scirrus</i>	ronco
TETRAODONTIDAE	<i>Sphoeroides testudineus</i>	pez sapo
SERRANIDAE	<i>Epinephelus guaza</i>	manteguilla

HOLOCENTRIDAE	<i>Holocentrus ascensionis</i>	tacantone
SCYLIORHINIDAE	<i>Cephaloscyllium uter</i>	tiburón peresoso
SYNGNATHIDAE	<i>Hippocampus hudsonius</i>	caballito de mar
OSTRACIIDAE	<i>Acanthostracion quadricornis</i>	pez gallina
RHINOBATIDAE	<i>Rhinobatos glaucostigma</i>	pez guitarra
CENTROPOMIDAE	<i>Centropomus pectinatus</i>	robalo
MULLIDAE	<i>Pseudupeneus dentatus</i>	salmonete
UROLOPHIDAE	<i>Urolophus jamaicensis</i>	raya de espina
ARIIDAE	<i>Bagre pinnimachlatus</i>	chunte
MURAENIDAE	<i>Gymnothorax ocellatus</i>	anguila
POMADASYIDAE	<i>Haemulon sciurus</i>	ronco
CARANGIDAE	<i>Oligoplites mundus</i>	zapatero
POLYNEMIDAE	<i>Polydactylus octonemus</i>	barbón blanco
CARANGIDAE	<i>Trachinatus carolinus</i>	pampano
SYNODONTIDAE	<i>Synodus foetens</i>	dormilon
ALBULIDAE	<i>Albula yulpes</i>	macabí
POMADASYIDAE	<i>Pomadasys bayanus</i>	caguacha
SCOMBRIDAE	<i>Scomberomorus maculatus</i>	sierra
POMADASYIDAE	<i>Conodon nobilis</i>	yarano
TRICHIURIDAE	<i>Trichiurus lepturus</i>	pez machete
CARANGIDAE	<i>Selene brevoortii</i>	pez plato

15. 漁獲物の流通

ホンデュラスの漁業は企業のエビ漁業と零細な沿岸漁業に大別される。

企業の漁業の漁獲物のエビ、イセエビと一部魚介は自社の冷蔵庫で冷凍加工されて、その製品の大部分は主として米国に輸出されて、自国での販売は傷物の極く一部である。漁獲物の魚類の大部分は海中に放棄されている。

ホンデュラス国内の漁獲物流通は沿岸漁業に依る魚介類である。

ホンデュラス国内の魚介類の流通構造は極めて幼稚である。ホ国南部及び北西部は背景に消費都市を控えて流通販売活動があるが、北東部では11月～2月の漁獲物を塩干物として販売する以外の大部分はその漁村の自家消費に向けられている。

ホンデュラス沿岸漁業の流通経路は一般個人の仲介に依る集荷に依って消費都市に運搬して販売するものと、政府の指導に依る漁業協会組合連合会に依る集荷、運搬販売を行っている2の系統がある。

個人仲買人に依る販売：この流通はホンデュラス漁村に自然に出来上ったものである。その構造は仲買人は漁民に漁具を貸付け、漁村に小型アイスボックスを置いて、漁民が漁獲した魚介類を検査して、そのアイスボックスに一時保管して、集荷が終えれば、その魚類をトラックに乗せて消費都市に運んで販売するものである。

魚類は魚種に依って1級魚、2級魚に区別され、魚価は1級、2級で固定されていて、日本の様にセリ又は入札に依る魚価を決める事はない。テラ (Tela) 地区では1級魚 $0.8 \sim 0.9 \frac{Lp}{Lb}$ 、2級魚は $50 \sim 70 \frac{Lp}{Lb}$ で消費都市では5割～2倍の格価で販売される。交通の不便な東部地区ではこの南部テラ地区の半値である。漁民の大部分は仲買人から舟、漁具を借受けていて、謂ゆる“ヒモズキ”である。漁期に依って一時大量の魚が水揚げされた場合は保管設備が貧弱なので魚価が急落する事がある。又降雨に依って交通が断れた場合も販売が出来なくなる事がある。当然魚価は下る。

漁業協同組合連合会に依る販売：ホンデュラス政府は沿岸漁民を組織化に依って沿岸漁業の発展を促進する事を計り、各漁村に漁業組合を設け、組合を通じて漁具、漁舟を貸与している。これに依って水揚げされた魚類はその地区に設けられた漁業協同組合連合会を通じて集荷販売している。この系統の流通系統は歴史が浅く魚の保管設備及漁具、漁舟が不足している。青年海外協力隊員は漁業協同組合連合に協力して販売事業の発展に寄与している。その代表的なものにテラ (Tela) 地区のノルテーニャ漁業協同組合連合会 (Cooperativa Union Nortena Ltd) がある。この連合会は配下組合員より魚価を割高に集荷し消費地に運び販売し資金を蓄積して、各組合の強化を計っている。

連合会は漁獲物の水揚地に氷蔵の冷蔵庫（中古品であるが2,000Lb容積）を設けてある。漁民は湖、海の漁場で漁獲した魚を集荷物で水揚する際、1級魚、2級魚に分けて検査して買付けする。買付けは組合員と非組合員からも買付けする。

買付魚価は下表の通りで、組合員からは非組合員より割高に買付けている。

第 8 表

組 合 員	魚 別	魚 価	備 考
組 合 員	1 級 魚	90 センタボ	1 級魚 ロパロ（ススキ）、コルビア（グチ） マカレラ（サワラ）、リサ（ボラ）、 カワチヤ 2 級魚 フーレル（ヒラアジ）、コベトナ、 ガポーテ
	2 級 魚	70 センタボ	
非 組 合 員	1 級 魚	80 センタボ	
	2 級 魚	50 センタボ	

買付けした魚はトラックでテラ（Tela）市より70 km内陸にあるプログレン（Progreso）市に運搬し仲買人に大半を卸す。更に西30 kmにあるサンペドロスーラ（San Pedro Sula）市に運搬し、市営市場、スーパーマーケット、病院、仲買人等に直接販売すると共に、連合会直営販売所で格安で一般住民に販買している。直営販売所は未だ店舗は小さいので、今後拡張の予定である。

販売価格は次表の通り

第 9 表

販 売 先	魚 別	魚 種	備 考
仲 買 人	1 級 魚	1.05 レンビーラ	魚価は魚体の大小、鮮度には関係ない。
	2 級 魚	0.85 レンビーラ	
病 院	1 級 魚	1.40 レンビーラ	
	2 級 魚	—	
市 場	1 級 魚	1.50 レンビーラ	
	2 級 魚	1.20 レンビーラ	

ノルテーニヤ漁業協同組合連合会（Cooperativa Union Nortena）の1979年10月1日から10月31日の実績は下記の通りである。

第 10 表

項 目	金 額		備 考
	レンピラ (Lp)	計	
事業収入の部			1Lp = US \$ 05
鮮魚売上高	1337230		US \$ 1 = 240 円として
氷売上高	5050		1Lp = 120 円
計		1342280	(1,610,736 円)
事業支出の部			
直接費			
鮮魚仕入高	△ 1101231		
氷仕入高	△ 37230		
計		△ 11,38461	(1,366,153 円)
事業粗利益		203819	(244,583 円)
管理費			
人件費	△ 35000		
旅費交通費	△ 56570		
業務費	△ 120		
雑費	△ 4455		
計		△ 96145	(115,374 円)
支出計		△ 12,34606	(1,481,527 円)
差引利益		<u>1,07674</u>	(129,209 円)

ノルテーニャ漁業協同組合はホンデュラス国では最も活発な活動をしている連合会ではあるが、漁具舟の不足、運搬車の不足の障害があって、扱量の不足等未だ軌道に乗ったとは云へない。

この連合会の背景には都市消費地があり、今後有望である。南部漁村も首都テグンガルパア (Tegucigalpa) に近く、有利な地位にあるが、集荷地の整備が不備で連合会の活動は未だ行なわれておらず、個人仲買人に依って集荷、首都に運搬販売している。その他地域の連合会でも計画されているが、道路の不備に依り個人仲買人に依る小範囲の販売にとどまっている。

加工品の流通：加工品は冷凍加工品と塩干製品があるが、冷凍加工品は殆んど企業体が直接対米に輸出して殆んど国内には出廻らない。

塩干品は4月上旬の聖週間と内陸部への魚の流通販売は塩干品が重要な役割を果たしている。

塩干品の流通には一時的に多額の資金を必要とするので、連合会では取扱い出来ず、民間の仲買人がその大部分を扱っている。

今後の流通機構に就いて：ホンデュラス国の魚介類の流通は極めて粗末であり、沿岸漁業の漁場が開発されて、漁獲増となっても流通機構が完備されなければ、各漁村の発展と国民への蛋白質供給増の目的は達せられない。従って現在活動を開始した漁業協同組合連合会への援助に依る体質の強化と共に、産業道路の整備と生産地に於ける鮮魚冷蔵保管設備の増強と消費地に貯蔵設備を拡大して常時消費者に魚介類を供給出来る方法を構ず可べである。ホンデュラスは鯖、鯉の缶詰が輸入されているが、現時点ではこれを自国で生産は困難であるので、冷凍製品で代替へする方法を構ず可きであろう。

16. 水産物の消費状況

ホ国のたん白質供給は畜産物はその大部分を占めており、漁業生産物の消費は畜産物の消費に比しはるかに少く、1978年における1人当たりの消費は0.98kgである。

これは、供給量が少いこと、道路事情等による流通機構が不完全なこと、流通機構からくる統一的な利ざやが大きいいため都市における価格が高いこと、食習慣上魚を食べることが少いこと等に起因すると考えられる。

ただ後でも述べるが自村消費（統計に表われないと考えられる）からみて数字以上消費はありと考えられる。

なお、上記の範囲内における消費傾向は次のとおりである。

消費地域

ホ国最大の消費地は、人口の多いテグシガルバとサン・ベドロ・スーラである。しかしこれはあくまで統計上の数字であり、ホ国の流通事情、漁村での浜売等々の状況からみて自村消費が相当あり、これが統計に表われないため都市消費が実際以上に多く表われると考えられる。

消費時期

ホ国においては聖週間（4月）があるため、この期間の前後は宗教的習慣により肉食をしないため魚の消費（ほとんどが干物）が全国的に増大する。漁業者は、この干物のため魚を11月から聖週間の4週間位前まで行うことから鮮魚の供給量は、この時期には減少する。

また、テグシガルバ、サン・ベドロ・スーラ等の小売業者を対象とした調査では、1週間の中では金曜と土曜日が最も多く買われるという結果がでてている。

消費者の嗜好

テグシガルパでのアンケートでは主婦の多くは魚の種類を区別せず、ただ1級魚か2級魚かのちがいにともづいて魚を買っており、一般的には体の赤い魚(1級魚が多い)が好まれている。

なお、同アンケートによると全体の97%が水産物を食べていると回答している。また、これは嗜好とは関係ないと考えられるが、低所得者層ほど食べる割合が低くなっている。

このことはおのずと都市における魚価が高いことを物語っていると考えられる。

17 水産物の貿易

1976年より78年に至る3年間の水産物輸出状況は輸出品目別・輸出先別に第11表に示めてある。同表で明らかなように、輸出品目の主体をなすものはエビ類の生鮮・冷蔵・冷凍品の輸出量が増加し、78年にはついに金額においてエビ類を上まわる状態となって来ている。いずれにせよ、全ての水産物輸出品目中エビ類及びイセエビ類が量においても金額においてもその大部分を占めていることは言をまたない。また輸出先別に見ると、エビ類については3年間を通じて米国向けが圧倒的に多く、他はわずかに数パーセントがプエルト・リコに輸出されているにすぎない。イセエビ類では、76年にはプエルト・リコ向けが大部分を占め米国向けは数パーセントにすぎなかったが、77年以降はその地位を逆転して大部分が米国向けとなった(統計数値を信用すれば上述のようであるが、76年の両国向け資料がミスタイプだとすると両国向け輸出の比率は3年間を通じてほぼ一定となる。その可能性についても考えられない訳ではない)。第3位の輸出品目としては、甘塩の干魚・鮮魚及び未加工魚肉があげられる。輸出先は米国の外に中米及びカリブ海の近隣諸国があるが、3年間を通じて輸出を続けているのは米国とプエルト・リコのみである。4位以下の輸出品目については量的にも金額の面でもごくわずかであって大勢に影響を与えるほどではない。

第 11 表 水産物輸出品目及び輸出先

輸出品目及び輸出先	1976		1977		1978	
	重量 (風袋込み) kg	価 額 US\$	重量 (風袋込み) kg	価 額 US\$	重量 (風袋込み) kg	価 額 US\$
1 甘塩の干魚・鮮魚及び未加工 魚肉	107,554	47,240.0	33,813	31,689.5	184,726	169,472.5
アメリカ合衆国	21,769	11,941.5	25,289	27,417.0	60,964	55,225.0
ガ テ マ ラ	—	—	2,760	1,050.0	45	100.0
ジャマイカ	8,230.2	33,473.5	2,313	1,530.0	—	—
ニカラグア	—	—	—	—	3,570	2,579.0
プエルト・リコ	3,483	1,825.0	3,451	1,692.5	120,157	111,568.5
2. タラ以外の塩干魚・燻製品・ 塩蔵品	2,028	2,300.0	—	—	6,810	3,975.0
ガ テ マ ラ	—	—	—	—	6,810	3,975.0
ニカラグア	2,028	2,300.0	—	—	—	—
3 タラの塩干魚・燻製品・塩蔵 品	6,818	1,200.0	—	—	—	—
ニカラグア	6,818	1,200.0	—	—	—	—
4 エビ・イセエビ以外の甲殻類 及び軟体動物の生	4,399	925.0	993	39,675	55,099	129,670.0
コスタ・リカ	—	—	—	—	491	295.0
アメリカ合衆国	—	—	—	—	4,390	9,005.0
ガ テ マ ラ	4,232	890.0	—	—	—	—
プエルト・リコ	167	350	993	29,675	50,218	120,370.0
5 エビの生・冷蔵・冷凍品	1,919,387	7,746,698.5	2,539,988	9,644,482.0	1,570,830	7,528,896.5
アメリカ合衆国	1,893,651	7,645,614.0	2,506,088	9,503,594.5	1,496,773	7,177,798.5
プエルト・リコ	25,736	101,084.5	33,900	140,887.5	74,057	351,098.0
6. イセエビの生・冷蔵・冷凍品	618,413	4,506,362.0	729,476	5,549,287.5	934,713	8,053,441.0
アメリカ合衆国	62,281	462,273.5	704,557	5,321,227.5	903,040	7,693,571.0
プエルト・リコ	556,132	4,044,088.5	24,922	228,060.0	31,673	359,870.0
7. 甲殻類・軟体動物のカン詰・ ビン詰(スープ、液汁を除く)	—	—	30	150	—	—
アメリカ合衆国	—	—	30	150	—	—
計	2,658,599	12,304,725.5	3,304,303	15,228,441.5	2,752,178	15,885,455.0

第 24 図には参考資料として、1978 年の月別水産物総販売量と、内訳として国内消費量及び外国向け輸出量とを示している。同図によって総販売量は外国向け輸出量の増減によって大きく影響されている様子がうかがえるし、また 2 月 15 日から 5 月末日までのエビ類に対する禁漁期の影響が大きく表れていることが示めされる。また第 25 図及び第 26 図には、夫々国内消費量の統計及びその主要品目の消費量が、また外国向け輸出量の統計及びその主要品目の輸出量が月別に示めされている。第 26 図ではエビ類に対する禁漁期中の生産下落の影響が更に顕著に見られる。

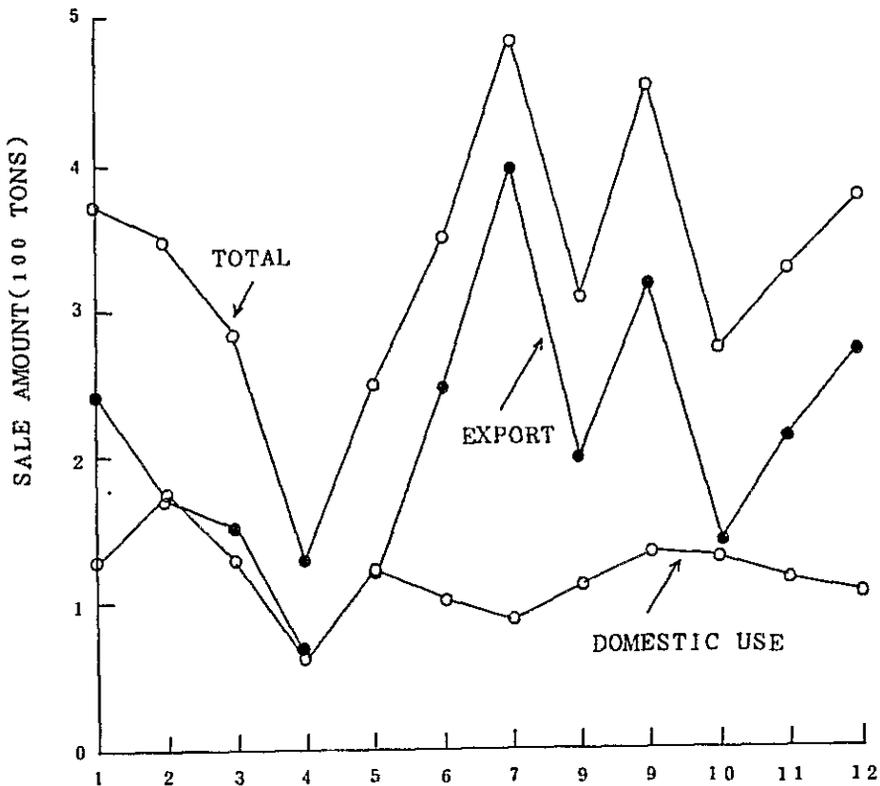
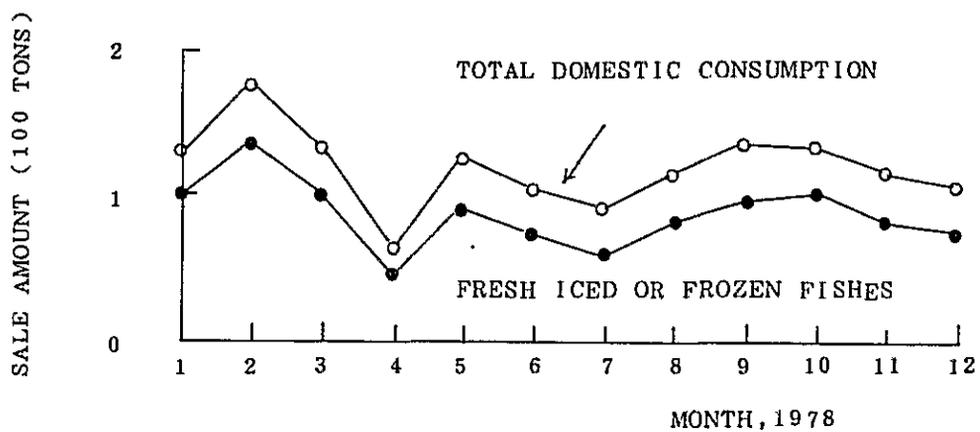
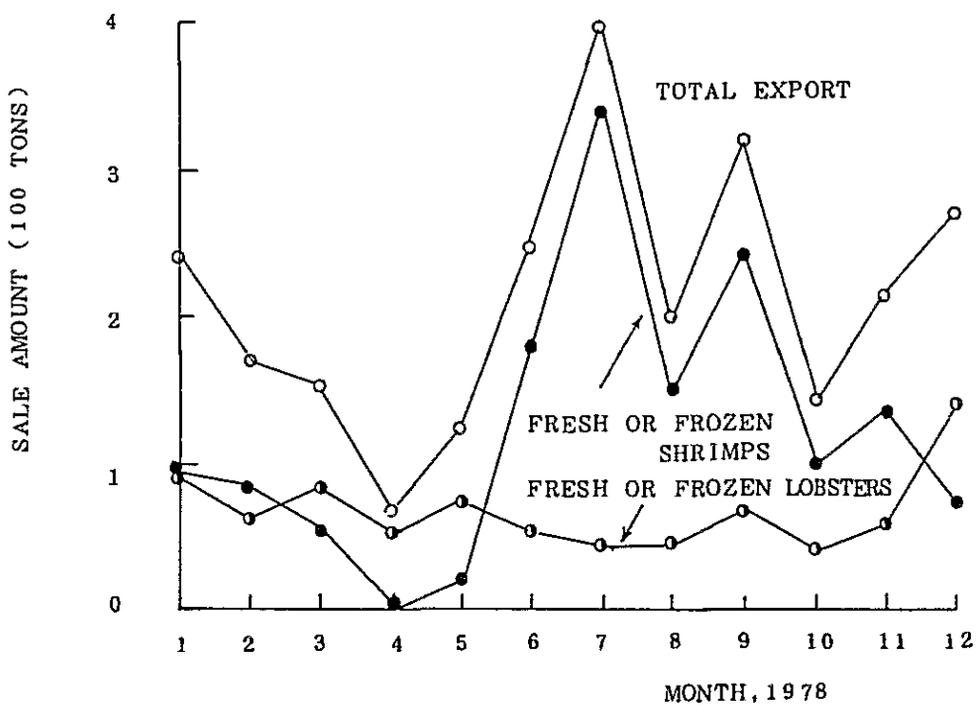


図 24 SALE AMOUNT OF FISHERIES PRODUCTS 1978



F 25 DOMESTIC CONSUMPTION OF FISHERIES PRODUCTS, 1978



26 EXPORT OF FISHERIES PRODUCTS, 1978

第12表には、同じく1978年における国内消費量及び輸出量の総計が品目別に示めしている。またそれらの販売高についても参考資料として示めしている。同表には、またそれぞれの漁業型態別に、国内消費及び輸出の量及び販売額をも併記してある。これらの資料によって沖合資本漁業ではその生産量の大部分が外国向け輸出として、また沿岸零細漁業ではその大部分が国内消費として使われている様子がわかるであろう。ここで零細漁業の輸出量6.8トン(13500USドル)は塩干魚によるものであることを附記しておく。

なお、第11表で示めた輸出量は風袋込みの重量であり、第12表、第24図、第25図及び第26図で示めた販売量は原資料には註がなかったが、冷凍などの処理・加工した後の製品重量であると考えられる。このため別章で述べた1978年の漁業生産量と上述の国内消費及び輸出の合計である総販売量との間に、また販売量のうちの外国向け販売量と輸出量との間にも夫々数値的差が生じたものであろう。参考のため注意しておく。金額についてはこれらの間に全く差異は見られない。

第12表 水産総売上げ量(Ton)及び総売上げ高(US\$) 1978

種 類	計		国内消費		輸 出	
	(Ton)	(US\$)	(Ton)	(US\$)	(Ton)	(US\$)
1. 鮮魚・氷蔵魚・冷凍魚	1,165.4	921,702.0	1,030.2	707,671.0	135.2	214,031.0
2. イセエビ(尾部)の生及び冷凍品	825.6	849,380.6	145	169,099.0	811.1	8,324,777.0
3. エビ(尾部)の生及び冷凍品	1,664.9	8,754,922.5	181.9	487,645.5	1,483.0	8,267,277.0
4. その他の甲殻類・軟体動物の生及び冷凍品	314.1	288,117.5	188.8	115,697.5	125.3	172,420.0
計	3,970.0	18,458,548.0	1,415.4	1,480,043.0	2,554.6	16,978,505.0
漁 業 形 態	計		国内消費		輸 出	
	(Ton)	(US\$)	(Ton)	(US\$)	(Ton)	(US\$)
1. 沖合資本漁業	2,747.4	17,565,297.5	1,996	600,292.5	2,547.8	16,965,005.0
2. 沿岸零細漁業	1,222.6	893,250.5	1,215.8	879,750.5	6.8	13,500.0
計	3,970.0	18,458,548.0	1,415.4	1,480,043.0	2,554.6	16,978,505.0

第13表には、1976年より78年にかけての品目別輸入量及び金額が示めされている。年度により差はあるが、輸入額は輸出額に比べて10%程度或いはそれ未満である。品目は20項目にわたっているが、量的に多いのは缶詰及び塩漬等の保存食品で、特に鯖、鯖等の缶詰が目立っている。輸出先については資料がないので不明である。

第13表 水産物輸入品目 1976～1978

輸 入 品 目	1976		1977		1978	
	重 量 (風袋込み) kg	価 額 US\$	重 量 (風袋込み) kg	価 額 US\$	重 量 (風袋込み) kg	価 額 US\$
1 甘塩の干魚・鮮魚・未加工魚肉	71,609	150.5	47,795	14,023.0	22,004	8,395.0
2 食用の魚卵	95	53,221.5	--	--	27	127.0
3 鑑賞用魚類	1,359	211.0	1,781	3,198.0	1,664	3,349.5
4 タラの塩干魚・燻製品・塩蔵魚	97,509	3,915.5	2,139	8,155.5	827	3,889.0
5 タラ以外の塩干魚・燻製品・塩蔵魚	852	192,903.5	14,231	16,483.0	77	857.5
6 甲殻類及び軟体動物の生(生きて いるもの/死の直後)	--	--	248	221.0	--	--
7 エビの生・冷蔵・冷凍品	8,880	22,375.0	66,473	138,326.0	16,267	33,524.5
8 イセエビの生・冷蔵・冷凍品	--	--	8	82.5	3,634	16,437.0
9 エビ・イセエビ以外の甲殻類及び 軟体動物の生	5,143	11,486.0	7,591	12,984.5	1,677	4,249.5
10 甲殻類・軟体動物の塩干・燻製・ 塩蔵品	1,644	4,599.0	279	682.0	420	880.5
11 トマト・ソースブライワシの缶詰	281,384	22,995.55	658,150	65,598.45	484,794	47,897.85
12 トマト・ソースづけ以外のイワシ の缶詰	30,489	4,226.05	50,113	53,090.5	48,147	76,340.0
13 タラの缶詰	382	1,177.5	182	418.0	2,307	5,401.5
14 鯖の缶詰	2,362	8,689.0	3,452	9,995.5	4,985	14,882.5
15 アンチョビー及びそのペーストの 缶詰・ビン詰	1,842	5,703.5	2,239	6,168.5	2,049	9,930.5
16 甲殻類及び軟体動物の缶詰 (スープ・液汁を除く)	6,537	15,396.0	6,500	14,584.0	13,487	37,447.0
17 キャビア等	218	1,111.0	216	903.0	214	548.0
18 魚・甲殻類・軟体動物のスープ・ 液汁の缶詰・ビン詰	1,085	1,712.5	1,073	3,464.0	2,138	8,360.5
19 塩またはトマト・ソースづけ鯖の 缶詰・ビン詰	274,969	174,150.0	462,525	378,675.5	287,160	256,795.5
20 鯖以外の魚及びその調理品缶詰 ビン詰	236,120	258,105.5	182,853	208,691.0	75,638	127,557.5
計	1,022,479	1,027,123.0	1,507,848	1,526,140.0	967,516	1,087,951.0

18 水産関連施設整備状況

ホンデュラス国には企業漁業の基地には各社が独自で自社のエビ船が接岸する為の岸壁又は棧橋を持っており、岸壁又は棧橋の近くの構内には冷凍加工場及び保冷の冷蔵庫が設けられている。製品の搬出は自社の岩壁又は棧橋から直接出来る迄に近代的設備が完備されている。

これに対して沿岸漁業に対しては殆んど施設はない。各漁村では自村の砂浜に舟を引揚げ(人力)、漁獲物は引揚げた舟から水揚げされ、漁具はその砂浜に卸され、その場で手入補修を行う。漁獲物はその場で仲買人に売渡し、アイスボックスに保管される。一部では一般にも公開販売されているが、その大部分は仲買人に引取られている。

漁村の漁業用の設備は漁獲物の保管用のアイスボックス程度で、漁舟係留用の築港、漁具保管倉庫、エンジン整備工場の施設は殆んど無い。

消費都市には青果市場があり、その一部に鮮魚及び塩干製品販売店があるが、極めて小さく鮮魚市場とは云えない。

ホンデュラス国商業港として同国の北西部にプエルト・コルテス (Puerto Cortes) 港がある。この港は1万屯級船が同時に数隻接岸出来る岸壁を備え、岸壁の隣接地には保税倉庫コンテナ基地があり、30屯クレーンが設備されてホンデュラス国唯一の近代港である。この港はホンデュラスのパナナ、パイナップル、コーヒー、木材等農産物を主として積出され、輸入は日用品、機械類、缶詰食料等同国の必需品の大部分である。この港は漁業用としては殆んど利用されていない。

目下東部のコロロン州のトゥルヒーヨ (Trujillo) の北方プエルト・カスティリヤ (Puerto Castilla) に商港を建設中である。拡大な敷地に近代的設備を造り、こゝより首都に直結する高速道路も併せて建設中であり、完成すればプエルト・コルテス (Puerto Cortes) を凌駕する商港となり、開発のおくれているこの地域の経済発展に寄与するものである。この港も漁業用に利用の計画は無い様であるが、間接的には漁業活動の刺激にはなるものと思われる。

南部はアマバラ (Amapala) 沖が商船の錨泊地で積荷は“ハシケ”で荷揚げされている。アマバラ (Amapala) には小型棧橋があり、その附近には港湾管理施設があり、一応貿易港の内容を持ってはいるが、本土と離れて本土への輸送が不便な為、目下本土側のサンロレンソ (Sanlorenso) に港を建設中である。之等の港湾は漁業用には使用されていないが、鮮魚輸送には利用されている。サンロレンソ (Sanlorenso) にはカワエビの養殖試験場がある。

19. 漁業関係機関とその業務の概要

漁業部門に対してその関係度合に大小はあるものの種々の省庁が関与している。しかし、それぞれの省庁間での連携は十分といえず、このことがホ国の漁業の発展の防げの一因となっていると考えられる。主要な省庁等は以下のとおりである。

天然資源省天然資源更生総局漁業部

ホ国漁業に直接関係のある機関であり、今回の資源調査に対する主管官庁でもある。その業務として、①水産技術面における研究、指導及び普及、②水産統計、③漁業法の適用及び取締り、④水産資源保護等がある。出先機関として海洋生物研究所（更生総局セイバ支所を兼ね小規模な海洋生物研究と統計業務を行っている）と4ヶ所の支所があり、12名の狩猟・漁業監督官が駐在している。なお、ホ国全体でいえることであるが、当機関でも所属人員が少く、かつ水産技術者がほとんどいないのが現状である。

天然資源省漁民漁業開発プロジェクト事務所

国家開発計画の一環として漁民の為の漁業開発プロジェクトであり、B.I.D.及びC.E.E.からの融資とホ国の資金により同プロジェクトの計画書（F.A.O.とB.I.D.が作成）の実行機関として関係諸官庁の取りまとめ役として設立された。現在は、協同組合助成局とタイアップして漁民に対し漁業協同組合の組織作りとその運営に対する講習会を開催するとともに、単独にて外国技術者を招へいして漁民に対する講習会を行っている。

協同組合助成局農牧部

漁業協同組合を含む各種協同組合の組織作り及び管理運営を担当しており、漁具等を組合に貸与している。

経済企画庁森林漁業部

5ヶ年計画の最終責任機関であり、対外に対する調整と決定を行っており、今回の資源調査には天然資源総局とともに関与している機関である。1979年9月から本機関が調整官庁として、漁業に関する各機関の情報交換、問題点等の検討を目的とするホ国の水産関係諸機関からなる委員会が発足した。このメンバーは、現在のところ経済企画庁、天然資源更生総局、漁民漁業開発プロジェクト事務所、協同組合助成局、文部省、経済省、職業訓練学校等が含まれており、外国機関としては職業訓練学校にスペイン・ミッション及び青年海外協力隊が参加している。

そ の 他

上記の他に職業訓練学校農牧課、文部省、経済省産業開発センター、港湾公社等が漁業に関連した業務を行っているが、その活動は微々たるものである。

20. 日本以外の海外からの協力

ホ国の水産業に対しては、従来、大規模な経済又は技術協力は実施されておらず、中華民国の技術協力による淡水エビ養殖プロジェクト（1974年から現在まで、援助額483千レンピラ、専門家4名）が最大でその他に職業訓練学校におけるスペインミッションの技術教育の専門家派遣、他に淡水魚養殖におけるアメリカの平和部隊の協力がある程度である。

また、資源調査については、FAOが1970年から4年間カリブ海全域を調査し、その調査の中にホ国領海域が含まれていた。ただ、この調査は海洋生物調査であり具体的な資源調査ではなかった。

JICA